

第21回学習物理領域セミナー + 第73回DLAP

行列分解問題へのベイズ統計学的アプローチ



茨城大学
Ibaraki University

MLPhyS

2025/11/20

茨城大学 竹田 晃人

目次

A 行列分解問題とその種類

B 行列分解問題とベイズ統計学
物理(統計物理)とのつながり

C スパース行列分解に対する変分ベイズ解析

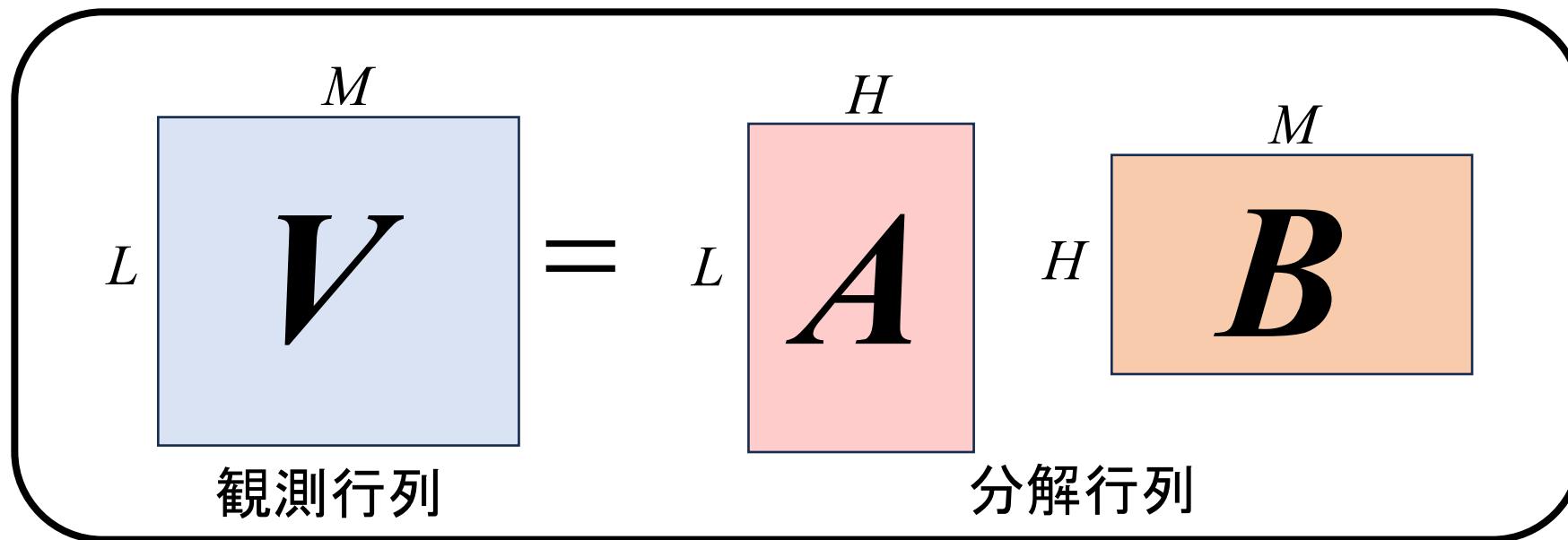
D Hopfield模型に対する解析手法と行列分解問題との関係

解説
部分

独自の
研究

- 本研究の内容は、以下の方々との共同研究に基づきます。
川澄亮太氏（群馬大学）、玉井智貴氏、遠藤優介氏（（元）茨城大学）
- セミナー当日に使用したファイルから一部（版権関係）を
削除していますので御了承ください。また、細かい修正も行っています。

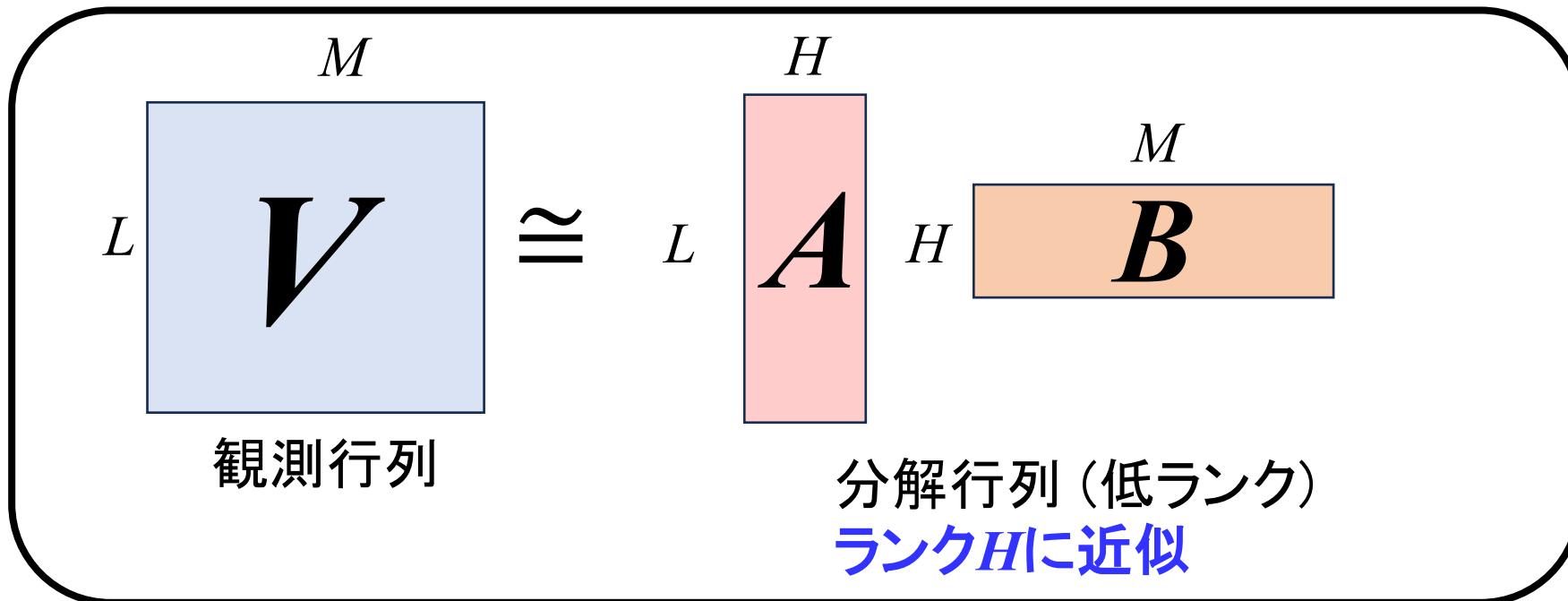
[partA] 行列分解問題



- 既知の観測行列 V から行列積を構成する未知の **分解行列 A と B** を決定
- 適切な問題設定の下で分解行列は **観測行列の特徴量** を含む
→ 機械学習の問題で重要 例えば 特異値分解(SVD)や主成分分析(PCA)も行列分解
- 機械学習の実問題でも頻出 (例については後述)
- ニューラルネットワークとも関係

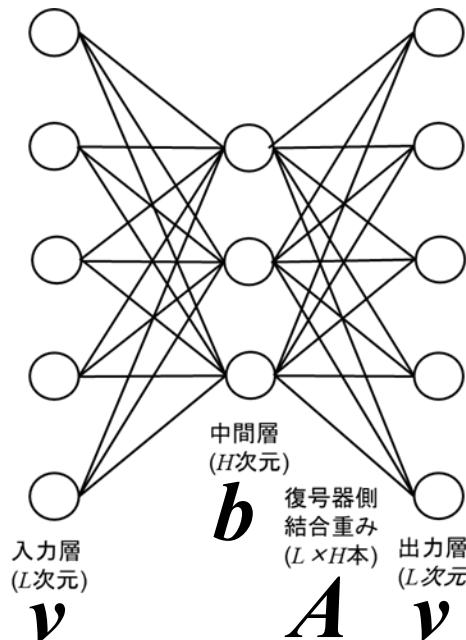
● 低ランク行列分解

- ・ H が小さい場合 (V から少数の特徴量を抽出)
※ 行列分解では一般に低ランク性を課すことが多い
- ・ 特異値分解 (SVD) を使うことで低ランク近似が可能
- ・ 原情報の圧縮に利用可能 (画像データの低次元圧縮等)



[partA] 低ランク行列分解とオートエンコーダ

オートエンコーダ(自己符号器) Hinton-Salakhutdinov (2006)



- 入力情報と出力情報が一致するように学習するニューラルネットワーク
- 中間層次元 (H) < 入力層次元 = 出力層次元 (L)
- 学習が進むと、中間層には入力情報の**次元圧縮情報**が格納
→ 次元削減器

$$v = f(Ab)$$

出力層
(入力層)
非線形
関数
復号器側
結合重み
中間層

- $f(x) = x$ (線形関数)
- 入力情報を M 個使う

入力情報=出力情報(M 個, L 次元)

$$v_1, v_2, \dots, v_M$$

$$L \begin{matrix} M \\ V \end{matrix} \cong L \begin{matrix} H \\ A \end{matrix} H \begin{matrix} M \\ B \end{matrix}$$

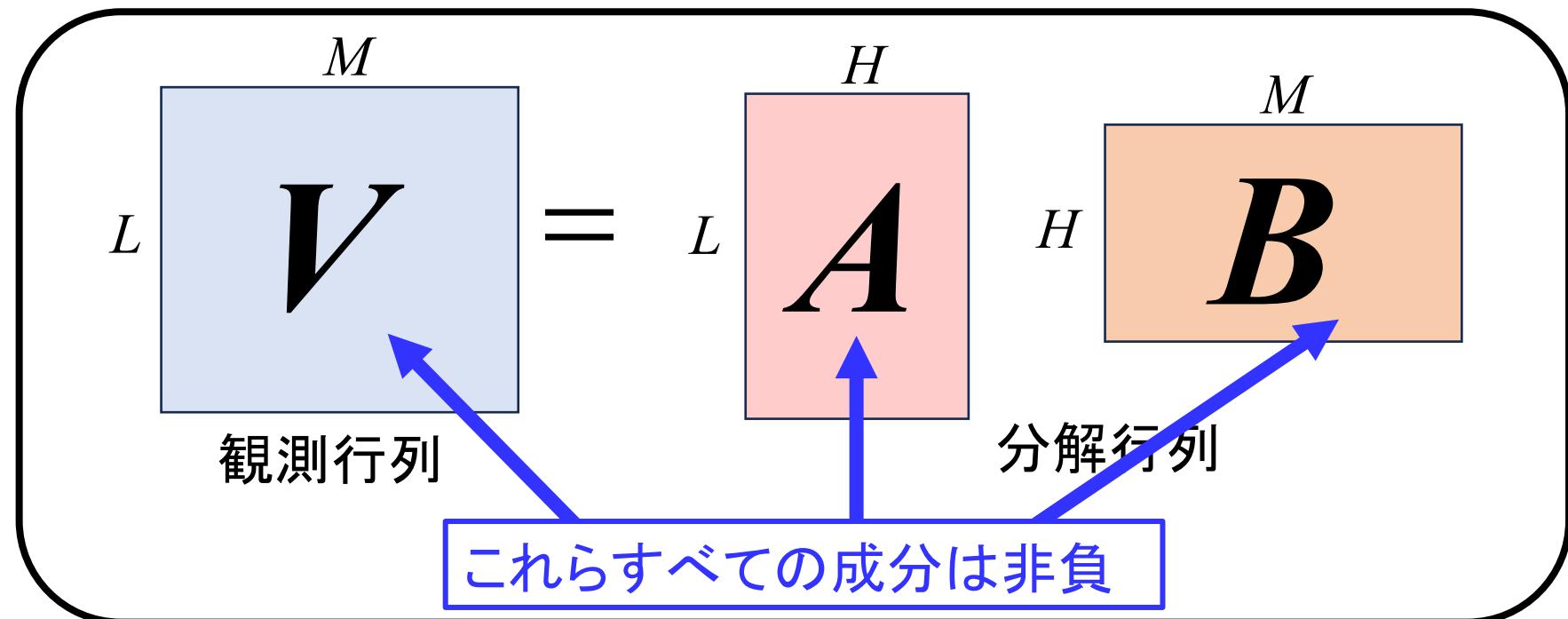
復号器側
結合重み

中間層の情報(M 個, H 次元)
 b_1, b_2, \dots, b_M

低ランク行列分解はある種のオートエンコーダ

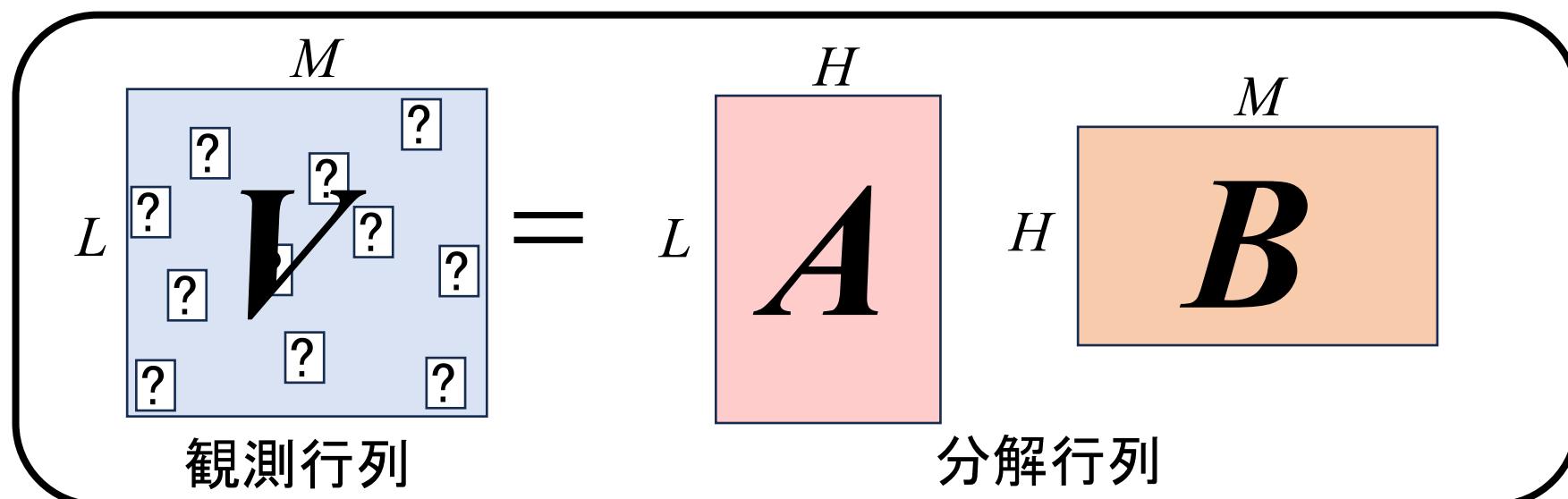
● 非負値行列分解

- ・ V, A, B の成分が非負
- ・ データが非負である場合 (画素値, 信号振幅, 評価値…) の特徴抽出方法
- ・ A, B を交互に求めるアルゴリズム (Lee-Seung (2000) 等)
- ・ 音源分離, 文書等のクラスタリング, バイオインフォマティックス等応用多数



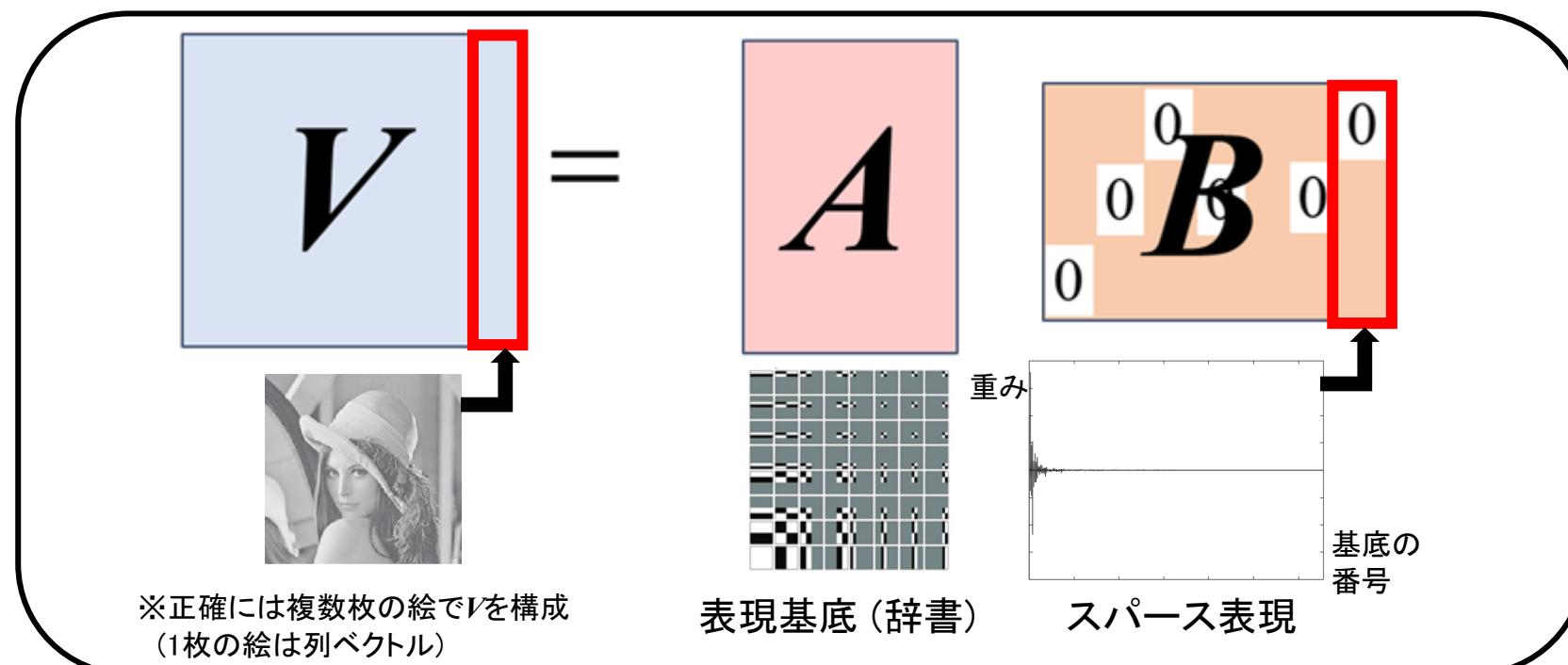
● 行列補完問題

- ・ V を全て観測できないが、 V の未観測成分が知りたい
- ・ V の観測可能成分のみから分解行列 A, B を計算(推定)し、それを基に V の未観測成分を補完
- ・ 推薦システム(協調フィルタリング)、画像修復等に利用可能



● スパース行列分解

- ・ 片側の分解行列がスパース(ゼロ成分を多く含む)
- ・ 観測行列の潜在的なスパース表現(B)とその基底(A , 辞書)を求める
スパース学習では重要, 神経科学でも重要(スパースコーディング)
- ・ アルゴリズムは多数提案 (例: MOD, K-SVD, sparsePCA)

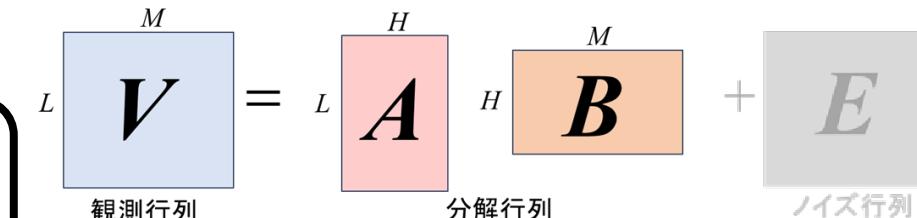


[partB] ベイズ統計学の形式による行列分解

ベイズ推定の形式で分解行列の性質を調べる

分解行列解 \mathbf{A}, \mathbf{B} の事後分布 尤度($=V, A, B$ の関係) 事前分布

$$P(\mathbf{A}, \mathbf{B} | V) \propto P(V | \mathbf{A}, \mathbf{B}) P(\mathbf{A}) P(\mathbf{B})$$



- 尤度でよく使われる設定: V にガウスノイズ行列 E が加わる

$$P(V | \mathbf{A}, \mathbf{B}) \propto \exp\left(-\frac{1}{\sigma^2} \|V - AB\|_{\text{FRO}}^2\right) \quad \|X\|_{\text{FRO}} = \sqrt{\sum_{ij} (X_{ij})^2} \quad \text{フロベニウスノルム}$$

- 事前分布に関する設定: 分解行列 A, B の性質を決定 (簡単なのはガウス分布)

目的

- 分解行列 A, B の推定

← 事後分布の最大解 (MAP解) を求める : 難しい

← 周辺化事後分布を計算 (着目成分以外を積分し除く) し各行列要素を推定 : 難しい

- 上記のガウスノイズの尤度には, A, B の4次項 (4体相互作用) が入る
- 事前分布が複雑な形だと, さらに周辺分布を求めるのが困難

$$P(A_{ij} | V) = \int dA_{(ij\text{以外})} dB P(A, B | V)$$

周辺化事後分布

- 行列分解問題の解の典型的な性質の解析

これらは簡単にはできない → 様々な解析技術が必要

ベイズ推定による行列分解の解析手法はいくつか知られている
(※ほぼ、ランダム系に対する統計力学的手法が由来)

(1) サンプリングによる手法 (マルコフ連鎖モンテカルロ等)

確率分布からのサンプリング

(2) レプリカトリック

自由エネルギーのランダム平均の手法

(3) 近似メッセージ伝搬法 (AMP)

Bethe近似法を発展させた局所物理量(周辺分布)の評価法

(4) Thouless–Anderson–Palmer (TAP) 方程式

元々はスピングラスの局所物理量・自由エネルギーの評価形式

(5) 変分ベイズ法

変分法による自由エネルギーの評価形式

[partB] (1) サンプリングによる行列分解

- ◆ サンプリングによる手法 (マルコフ連鎖モンテカルロ等)
実際の分解行列解の求解を確率分布のサンプリングにより実施
(ベイズ推定による分解行列解の解析的表現を最後まで求めない)

$${}_L^M \boxed{V} = {}_L^H \boxed{A} {}_H^M \boxed{B} + \boxed{E}$$

観測行列 分解行列 ノイズ行列

$$P(\textcolor{red}{A}, \textcolor{red}{B} | V) \propto P(V|A, B)P(A)P(B)$$

分解行列解 $\textcolor{red}{A}, \textcolor{red}{B}$ の事後分布 尤度($=V, A, B$ の関係) 事前分布

左辺の事後分布に従う具体的な分解行列 A, B を **サンプリング**により生成

[partB] (1) サンプリングによる行列分解

Salakhutdinov-Mnih (2008)

$${}^L \begin{matrix} M \\ V \end{matrix} = {}^L \begin{matrix} H \\ A \end{matrix} {}^H \begin{matrix} M \\ B \end{matrix} + {}^E \begin{matrix} E \end{matrix}$$

観測行列 分解行列 ノイズ行列

階層的ベイズモデル

$$P(\mathbf{A}, \mathbf{B} | \mathbf{V}) \propto P(\mathbf{V} | \mathbf{A}, \mathbf{B}) P(\mathbf{A} | \boldsymbol{\mu}_A, \mathbf{C}_A) P(\mathbf{B} | \boldsymbol{\mu}_B, \mathbf{C}_B)$$

事後分布 尤度 事前分布 (パラメータ含む)

- 尤度 (ノイズ行列 E がガウス分布):

$$P(\mathbf{V} | \mathbf{A}, \mathbf{B}) \propto \exp \left(-\frac{1}{\sigma^2} \|\mathbf{V} - \mathbf{AB}\|_{\text{FRO}}^2 \right)$$

- 事前分布 (多次元ガウス分布, パラメータ付)

$$P(\mathbf{A} | \boldsymbol{\mu}_A, \mathbf{C}_A) = \prod_{i=1}^N \mathcal{N}(\mathbf{a}_i | \boldsymbol{\mu}_A, \mathbf{C}_A^{-1})$$

$$P(\mathbf{B} | \boldsymbol{\mu}_B, \mathbf{C}_B) = \prod_i \mathcal{N}(\mathbf{b}_i | \boldsymbol{\mu}_B, \mathbf{C}_B^{-1})$$

- 事前分布のパラメータ (平均と共分散行列) の分布 (ガウス-ワイシャート分布)

$$P(\boldsymbol{\mu}_A, \mathbf{C}_A) = \mathcal{N}(\boldsymbol{\mu}_A | \boldsymbol{\mu}_0, (\beta_0 \mathbf{C}_A)^{-1}) \mathcal{W}(\mathbf{C}_A | \mathbf{W}_0, \nu_0)$$

$$P(\boldsymbol{\mu}_B, \mathbf{C}_B) = \mathcal{N}(\boldsymbol{\mu}_B | \boldsymbol{\mu}_0, (\beta_0 \mathbf{C}_B)^{-1}) \mathcal{W}(\mathbf{C}_B | \mathbf{W}_0, \nu_0)$$

$\boldsymbol{\mu}_A, \mathbf{C}_A \rightarrow \boldsymbol{\mu}_B, \mathbf{C}_B \rightarrow \mathbf{A} \rightarrow \mathbf{B}$

の順でサンプリングを繰り返す → 分解行列解
(マルコフ連鎖モンテカルロ法など)

応用例(手法のテスト): Netflixの映画レーティング予測 (行列補完問題)

[partB] (2) レプリカトリック

◆ レプリカトリック

行列分解問題を自由エネルギー形式に落とし,
ランダム平均をレプリカトリックにより実行し, 分解行列解の典型的な性質を評価

Sakata-Kabashima (2013)

スパース行列分解の解の典型的な性能を調べる

$$L \begin{matrix} M \\ V \\ = A_0 B_0 \end{matrix} = L \begin{matrix} H \\ A \end{matrix} H \begin{matrix} M \\ B \end{matrix}$$

以下の最適化問題の求解でスパース行列分解を実施した場合の典型性能解析
(用意した分解行列解(埋め込み解) A_0, B_0 が実際に求めた解と一致するか?)

$$\min_{A,B} \|V - AB\|_{\text{FRO}}^2 \quad \text{subj. to} \quad \|A\|_{\text{FRO}}^2 = LH \quad \|B\|_0 = HM \theta$$

$$\|B\|_0 = \sum_{ij} \mathbf{1}(B_{ij} \neq 0)$$

行列 ℓ_0 ノルム
(非ゼロ成分数)

↑ 非ゼロ成分
の割合

[partB] (2) レプリカトリック

ベイズによる定式化と分配関数

$$\min_{A,B} \| A_0 B_0 - AB \|^2_{\text{FRO}} \quad \text{subj. to} \quad \| A \|^2_{\text{FRO}} = LH \quad \| B \|_0 = HM\theta$$

$$L \begin{matrix} M \\ V \\ = A_0 B_0 \end{matrix} = L \begin{matrix} H \\ A \end{matrix} H \begin{matrix} M \\ B \end{matrix}$$

L (事後分布) L (尤度) H (事前分布)

$$P(\mathbf{A}, \mathbf{B} | A_0, B_0) \propto P(A_0, B_0 | A, B) P(A) P(B)$$

事後分布 尤度 事前分布

- 尤度 (ボルツマン分布として設定, ゼロ温度で最適化問題)

$$P(A, B | A_0, B_0) \propto \exp\left(-\frac{\beta}{2H} \| AB - A_0 B_0 \|^2_{\text{FRO}}\right)$$

- 事前分布 (A は正規化条件, B は非ゼロ成分数を固定する制約)

$$P(A) = \delta\left(\| A \|^2_{\text{FRO}} - LH\right) \quad P(B) = \delta\left(\| B \|_0 - HM\theta\right)$$

[partB] (2) レプリカトリック

- 分配関数 (ベイズ統計学としては周辺尤度)

$$Z = P(A_0, B_0)$$

$$= \int dA \int dB P(V|A, B)P(A)P(B)$$

$$= \int dA \int dB \exp\left(-\frac{\beta}{2H} \|AB - A_0B_0\|_{\text{FRO}}^2\right) \delta(\|A\|_{\text{FRO}}^2 - LH) \delta(\|B\|_0 - HM\theta)$$

$$L \begin{matrix} M \\ V \\ = A_0 B_0 \end{matrix} = L \begin{matrix} H \\ A \end{matrix} H \begin{matrix} M \\ B \end{matrix}$$

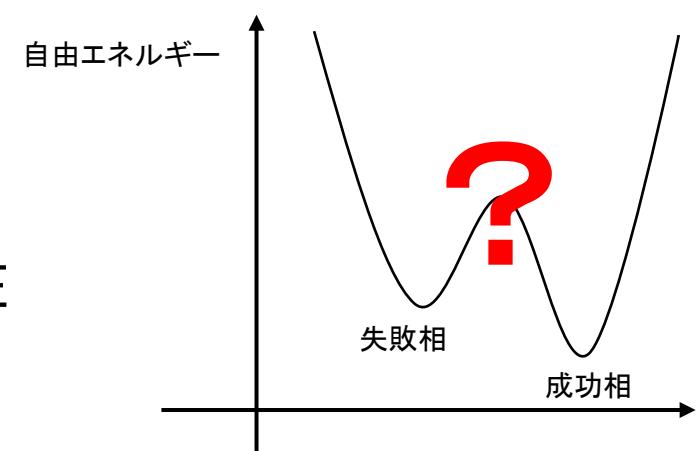
- 最適化の解の典型的性質 → 復元成功相と失敗相の自由エネルギー比較
※自由エネルギーの正解行列 A_0, B_0 での平均操作の際にレプリカトリックが必要

- 自由エネルギーの解析から…

埋め込み解を取り出せる条件が議論可能

例: 次元 M を増加 → 埋め込み解が取り出せる M の閾値が存在

(成功相が失敗相より自由エネルギーが低くなる)



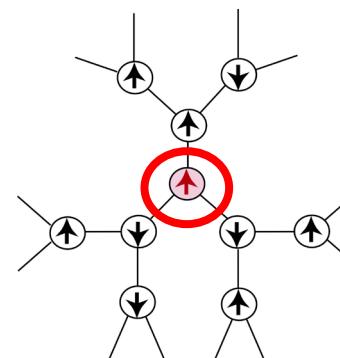
[partB] (3) 近似メッセージ伝搬法 (AMP)

◆ 近似メッセージ伝搬法 (AMP)

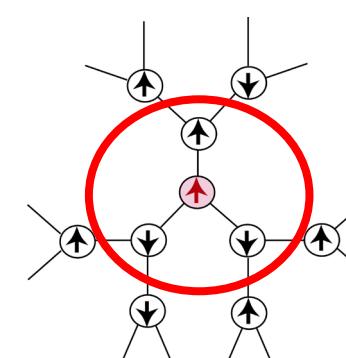
ベイズ行列分解のアルゴリズム (および性能評価法) をメッセージ伝搬法に基づき構成

分解行列 A, B の特定の行列要素の周辺分布を計算し、行列要素を推定
 (物理的には1体問題化のための計算手法)

- ・平均場近似 = 着目している変数以外を外場(平均場)として近似
- ・Bethe近似 = 近接サイトの影響まで厳密に計算し、それ以外の影響は外場(cavity場)
→ 相互作用がスパースな系で特に有効な近似
- ・メッセージ伝搬法 = Bethe近似に基づき、周辺分布(物理的には局所磁化等)を求めるアルゴリズム
- ・近似メッセージ伝搬法 (AMP)
= 密な相互作用を持つ系で、ガウス近似を利用しメッセージ伝搬法を精密化・高速化したもの



平均場近似
着目変数以外は
外場(平均場)
として表現

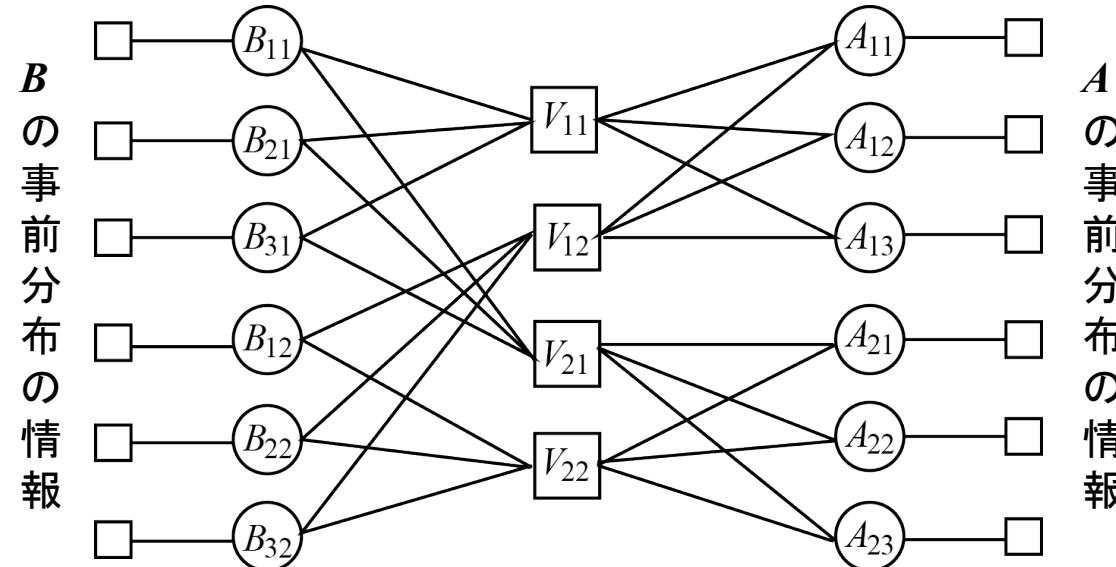


Bethe近似
着目変数の近接サイトまでは厳密
それ以外は外場 (cavity場)

[partB] (3) 近似メッセージ伝搬法 (AMP)

Kabashima–Krzakala–Mézard–Sakata–Zdeborová (2016)

一般の行列分解の問題について、AMP (正確にはgeneralized AMP) で行列を分解する手法を提案



行列分解を表すファクターグラフ、このグラフ上をメッセージ伝搬

$$V = A \otimes B$$

- AMPに状態発展法(State Evolution, SE)を組み合わせることで、行列分解問題の典型性能解析が可能
→ スパース行列分解、行列補完問題… 等様々な行列分解問題が解析できる

$$\begin{aligned}
 & \text{Vの分散} \quad V_{\mu l}^t = \frac{1}{N} \sum_j [c_{jl}(t)s_{\mu j}(t) + c_{jl}(t)\hat{f}_{\mu j}^2(t) + \hat{x}_{jl}^2(t)s_{\mu j}(t)] \\
 & \text{Vの期待値} \quad \omega_{\mu l}^t = \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_j \hat{x}_{jl}(t)\hat{f}_{\mu j}(t) - g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^{t-1}, y_{\mu l}, V_{\mu l}^{t-1}) \\
 & \qquad \times \frac{1}{N} \sum_j [\hat{f}_{\mu j}(t)\hat{f}_{\mu j}(t-1)c_{jl}(t) + \hat{x}_{jl}(t)\hat{x}_{jl}(t-1)s_{\mu j}(t)] \\
 & \text{Bの分散} \quad (\Sigma_{il}^t)^{-1} = \frac{1}{N} \sum_\mu \left\{ -\partial_\omega g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) [\hat{f}_{\mu i}^2(t) + s_{\mu i}(t)] - g_{\text{out}}^2(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) s_{\mu i}(t) \right\} \\
 & \text{Bの期待値} \quad T_{il}^t = \Sigma_{il}^t \left\{ \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_\mu g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) \hat{f}_{\mu i}(t) - \hat{x}_{il}(t) \frac{1}{N} \sum_\mu \hat{f}_{\mu i}^2(t) \partial_\omega g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) \right. \\
 & \qquad \left. - \hat{x}_{il}(t-1) \frac{1}{N} \sum_\mu s_{\mu i}(t) g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^{t-1}, y_{\mu l}, V_{\mu l}^{t-1}) \right\} \\
 & \text{Aの分散} \quad (Z_{\mu i}^t)^{-1} = \frac{1}{N} \sum_l \left\{ -\partial_\omega g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) [\hat{x}_{il}^2(t) + c_{il}(t)] - g_{\text{out}}^2(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) c_{il}(t) \right\} \\
 & \text{Aの期待値} \quad W_{\mu i}^t = Z_{\mu i}^t \left\{ \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_l g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) \hat{x}_{il}(t) - \hat{f}_{\mu i}(t) \frac{1}{N} \sum_l \hat{x}_{il}^2(t) \partial_\omega g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) \right. \\
 & \qquad \left. - \hat{f}_{\mu i}(t-1) \frac{1}{N} \sum_l c_{il}(t) g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^t, y_{\mu l}, V_{\mu l}^t) g_{\text{out}}(\omega_{\mu l}^{t-1}, y_{\mu l}, V_{\mu l}^{t-1}) \right\} \\
 & \hat{x}_{il}(t+1) = f_X(\Sigma_{il}^t, T_{il}^t), c_{il}(t+1) = f_c(\Sigma_{il}^t, T_{il}^t), \\
 & \hat{f}_{\mu i}(t+1) = f_F(Z_{\mu i}^t, W_{\mu i}^t), s_{\mu i}(t+1) = f_s(Z_{\mu i}^t, W_{\mu i}^t)
 \end{aligned}$$

(細かい記号の定義は原論文を参照)

◆ Thouless–Anderson–Palmer (TAP) 方程式

- ・スピングラスのThouless–Anderson–Palmer(TAP)形式(局所磁化の記述形式)による行列分解の解析
- ・AMPによる行列分解解析手法には問題が指摘(厳密ではなく近似)
- ・TAP自由エネルギーをPlefka–Georges–Yedidia(PGY)展開 = 相互作用係数展開で評価
→ AMPは展開の2次までの近似, 一般には3次以上も考慮する必要あり

※この方法で独立成分分析(ICA)を解析中 (Endo–Takeda, STATPHYS29)

Maillard–Krzakala–Mézard–Zdeborová (2022)

$B = A^T$ となる対称行列(以下のAがガウス型ランダム行列 $\rightarrow AA^T$ がワイシャート行列)の行列分解問題

$$\begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \boxed{\mathbf{V}} = \begin{matrix} H \\ L \end{matrix} \boxed{\mathbf{A}} \begin{matrix} H \\ L \end{matrix} \boxed{\mathbf{A}^T} + \boxed{\mathbf{E}}$$

観測行列 分解行列
(ワイシャート行列) ノイズ行列

ワイシャート行列のノイズ除去問題を解く

(厳密解が別な方法で得られる → Harish–Chandra–Itzykson–Zuber行列積分とブラウン運動の議論)
→ PGYの2次近似(AMP)は厳密解から少しずれている

[partB] (5) 変分ベイズ法

◆ 変分ベイズ法

変分自由エネルギー形式により、分解行列解の統計的性質を変分法で評価

Ilin-Raiko (2010), Nakajima-Sugiyama (2011)

解析の流れ：

$${}_L^M \mathbf{V} = {}_L^H \mathbf{A} {}_H^M \mathbf{B} + \mathbf{E}$$

観測行列 分解行列 ノイズ行列

$$P(\mathbf{A}, \mathbf{B} | \mathbf{V}) \propto P(\mathbf{V} | \mathbf{A}, \mathbf{B}) P(\mathbf{A}) P(\mathbf{B})$$

分解行列解 \mathbf{A}, \mathbf{B} の事後分布 尤度($=\mathbf{V}, \mathbf{A}, \mathbf{B}$ の関係) 事前分布



事後分布をそのままの形で \mathbf{A}, \mathbf{B} の推定に使うのは面倒
 → 事後分布 $P(\mathbf{A}, \mathbf{B} | \mathbf{V})$ を推定しやすい形に近似する

[partB] (5) 変分ベイズ法

$$P(\textcolor{red}{A}, \textcolor{red}{B} | V) \propto P(V|A, B)P(A)P(B)$$

Kullback–Leibler情報量を利用する（確率分布間の距離）
 （物理的には自由エネルギーに対応）

$$\text{KL}(q(x) \| p(x)) = \int dx q(x) \log \frac{q(x)}{p(x)} \quad p(x), q(x) : \text{確率分布}$$

事後分布 $P(A, B | V)$ をよく近似する変分試行関数 $r(A, B)$ を求めたい
 → 次の関数に関する最小化問題を解く必要がある

$$\arg \min_{r(A, B)} \text{KL}(r(A, B) \| P(A, B | V))$$

$$\rightarrow \arg \min_{r(A), r(B)} \text{KL}(r(A)r(B) \| P(V|A, B)P(A)P(B))$$

\uparrow
 A, B の試行関数は独立とする（近似している）

[partB] (5) 変分ベイズ法

$$\begin{aligned} & \text{KL}(r(A)r(B) \| P(V|A, B)P(A)P(B)) \\ &= \int dA dB r(A)r(B) \log \frac{r(A)r(B)}{P(V|A, B)P(A)P(B)} \end{aligned}$$

変分関数の停留条件を求めて、試行関数が満たす関係式を書く

$$\begin{aligned} & \text{KL}((r(A) + \delta r(A))r(B)) - \text{KL}(r(A)r(B)) = 0 \\ \rightarrow & \quad r(A) = P(A) \exp \left(\int dB r(B) \log P(V|A, B) \right) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & \text{KL}(r(A)(r(B) + \delta r(B))) - \text{KL}(r(A)r(B)) = 0 \\ \rightarrow & \quad r(B) = P(B) \exp \left(\int dA r(A) \log P(V|A, B) \right) \end{aligned}$$

ここまで一般的な尤度や事前分布
指数関数の中に試行関数を含む(行列要素の)多重積分が残る

[partB] (5) 変分ベイズ法

以降は尤度と事前分布を以下のように仮定:

$$\begin{aligned}
 P(V|A, B) &= \frac{1}{\sqrt{(2\pi\sigma^2)^{LH}}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \|V - AB\|_{\text{FRO}}^2\right) && \text{ノイズはガウス分布} \\
 P(A) &= \frac{1}{\sqrt{(2\pi)^{LH}}} \exp\left(-\frac{1}{2} \text{Tr}AA^T\right) = \prod_l \prod_h \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{1}{2} a_{lh}^2\right) \\
 P(B) &= \frac{1}{\sqrt{(2\pi)^{MH}}} \exp\left(-\frac{1}{2} \text{Tr}BB^T\right) = \prod_m \prod_h \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{1}{2} b_{mh}^2\right)
 \end{aligned}
 \quad \boxed{\quad \quad \quad A, B \text{はガウス事前分布}}$$

前述の試行関数の条件にこれらを代入 → 各試行関数が多次元ガウス分布

$$\begin{aligned}
 r(A) &= P(A) \exp\left(\int dBr(B) \log P(V|A, B)\right) \rightarrow r(A) \propto \exp\left(-\frac{1}{2} \text{Tr}(A - \hat{A})\hat{\Sigma}_A^{-1}(A - \hat{A})^T\right) \text{ の形} \\
 r(B) &= P(B) \exp\left(\int dAr(A) \log P(V|A, B)\right) \rightarrow r(B) \propto \exp\left(-\frac{1}{2} \text{Tr}(B - \hat{B})\hat{\Sigma}_B^{-1}(B - \hat{B})^T\right) \text{ の形}
 \end{aligned}$$

[partB] (5) 変分ベイズ法

試行関数の事後分布の平均と共に分散行列 $\hat{A}, \hat{B}, \hat{\Sigma}_A, \hat{\Sigma}_B$ が満たす関係式を
試行関数の関係式より導出

$$P(V|A, B) = \frac{1}{\sqrt{(2\pi\sigma^2)^{LH}}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \|V - AB\|_{\text{FRO}}^2\right)$$

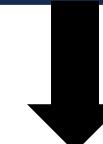
$$r(A) \propto \exp\left(-\frac{1}{2} \text{Tr}(A - \hat{A}) \hat{\Sigma}_A^{-1} (A - \hat{A})^T\right)$$

$$r(B) \propto \exp\left(-\frac{1}{2} \text{Tr}(B - \hat{B}) \hat{\Sigma}_B^{-1} (B - \hat{B})^T\right)$$



$$r(A) = P(A) \exp\left(\int dBr(B) \log P(V|A, B)\right)$$

$$r(B) = P(B) \exp\left(\int dA r(A) \log P(V|A, B)\right)$$



$$A \text{の事後平均 } \hat{A} = \frac{1}{\sigma^2} V \hat{B} \hat{\Sigma}_A$$

$$A \text{の事後共分散 } \hat{\Sigma}_A = \sigma^2 \left(\hat{B} \hat{B}^T + M \hat{\Sigma}_B + \sigma^2 I_H \right)^{-1}$$

$$B \text{の事後平均 } \hat{B} = \frac{1}{\sigma^2} \hat{\Sigma}_B \hat{A}^T V$$

$$B \text{の事後共分散 } \hat{\Sigma}_B = \sigma^2 \left(\hat{A}^T \hat{A} + L \hat{\Sigma}_A + \sigma^2 I_H \right)^{-1}$$

$\hat{A}, \hat{B}, \hat{\Sigma}_A, \hat{\Sigma}_B$ について閉じた式 → 解くことで試行関数が求まり、行列分解が可能

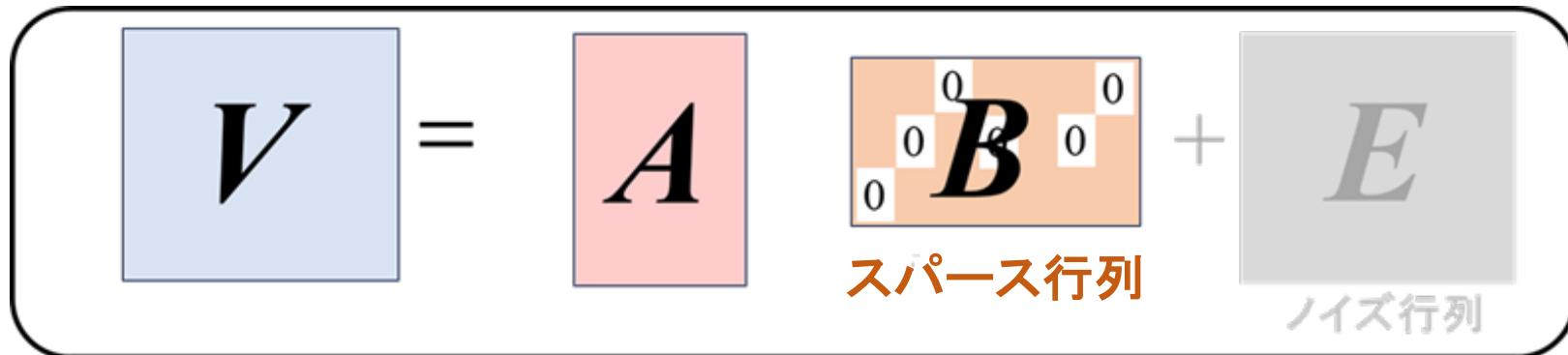
応用例: 変分ベイズ解を利用し、ノイズあり観測行列のランク推定の精度を特異値により議論

変分ベイズ法の形式で、スパース行列分解の性質を調べる

$$\mathbf{V} = \mathbf{A} \mathbf{B} + \mathbf{E}$$

スパース行列

ノイズ行列



- 分解行列の事前分布が**両方ともガウス分布**(スパース行列分解ではない)
前述の通り、**変分ベイズ法**を利用して分解行列が推定可能
- 分解行列の事前分布が**ガウス分布**と**ラプラス分布**
→ **この場合はスパース行列分解問題**になる
Kawasumi-KT (2018, 2023) 近似の下で、分解行列解の表現を書き下せる
→ スパース行列分解アルゴリズムとして使える

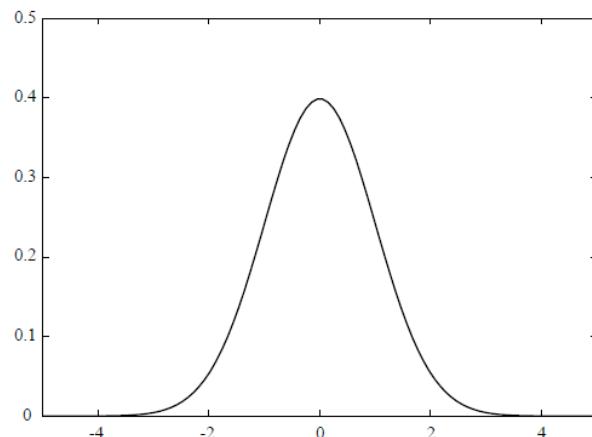
$$P([a_{lh}] = A) \propto \prod_{l=1}^L \prod_{h=1}^H \exp\left(-\frac{a_{lh}^2}{2}\right)$$

*Aの事前分布 (ガウス)
→ ℓ_2 正則化*

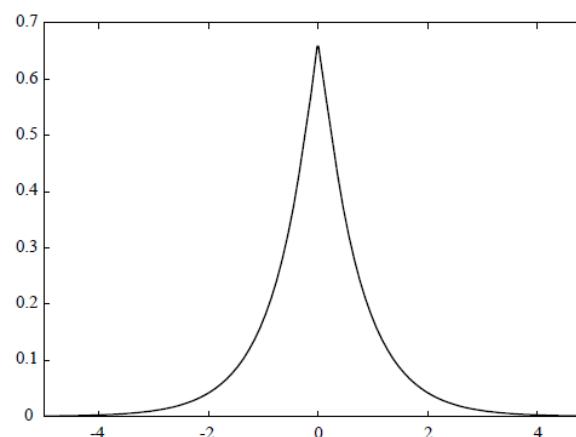
$$P([b_{hm}] = B) \propto \prod_{h=1}^H \prod_{m=1}^M \exp\left(-\frac{|b_{hm}|}{k}\right)$$

*Bの事前分布 (ラプラス)
→ ℓ_1 正則化*

k: 正則化係数 (後で重要)



ガウス分布



ラプラス分布
(ゼロ付近の密度が高い)

事前分布をラプラス分布にする
= ℓ_1 正則化
このとき、推定変数をスパースにできる
(推定結果にゼロ成分を多く含ませることが可能)

理由: 事前分布の形状よりも幾何学的な考察が必要
(圧縮センシングなどが分かりやすい)

[partC] ガウス事前分布→ラプラス事前分布の問題点

尤度と事前分布を以下のように仮定

$$P(V|A, B) = \frac{1}{\sqrt{(2\pi\sigma^2)^{LH}}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \|V - AB\|_{\text{FRO}}^2\right) \quad \text{ノイズはガウス分布}$$

$$P(A) = \frac{1}{\sqrt{(2\pi)^{LH}}} \exp\left(-\frac{1}{2} \text{Tr}AA^T\right) = \prod_l \prod_h \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{1}{2} a_{lh}^2\right) \quad A \text{はガウス事前分布}$$

$$P(B) \propto \prod_m \prod_h \exp\left(-\frac{1}{k} |b_{mh}| \right) \quad B \text{はラプラス事前分布}$$

試行関数の条件は一般的の分布で成り立つが

試行関数が多次元ガウス分布であることは言えない（試行関数の形は不明）

$$r(A) = P(A) \exp\left(\int dB r(B) \log P(V|A, B)\right) \rightarrow r(A) \propto \exp\left(-\frac{1}{2} \text{Tr}((A - \hat{A}) \hat{\Sigma}_A^{-1} (A - \hat{A})^T)\right) \text{ の形}$$

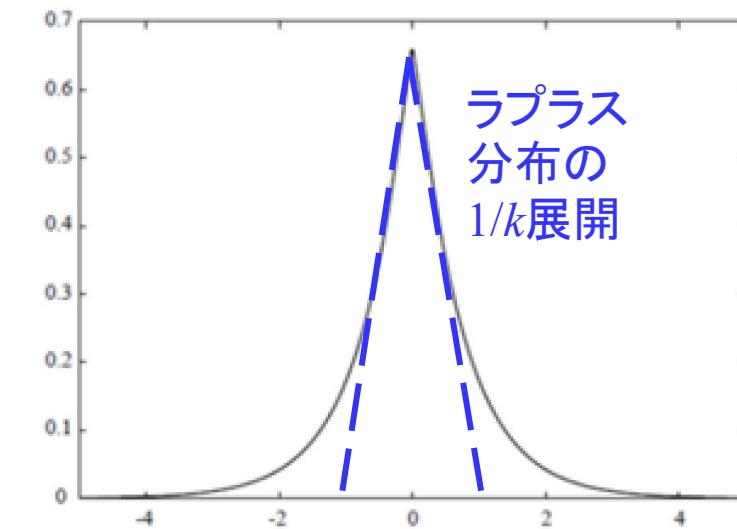
$$r(B) = P(B) \exp\left(\int dA r(A) \log P(V|A, B)\right) \rightarrow r(B) \propto \exp\left(-\frac{1}{2} \text{Tr}(B - \hat{B}) \hat{\Sigma}_B^{-1} (B - \hat{B})^T\right) \text{ の形}$$

[partC] ラプラス事前分布の下での近似

近似を置かないと解析が進まないので、以下の近似を置く

- 試行関数の成分独立性 (平均場近似) $r(A) = \prod_l \prod_h r_a(a_{lh}) \quad r(B) = \prod_h \prod_m r_b(b_{hm})$
- 事後分布の共分散行列 ($H \times H$ 行列) は対角成分のみを持つ (分散成分のみ)
- ラプラス事前分布のパラメータ (ℓ_1 正則化係数)について,
 $k \rightarrow \infty$ を仮定し, $1/k$ 展開 (1次まで)

$$P(B) \propto \prod_m \prod_h \exp\left(-\frac{1}{k} |b_{mh}| \right) \simeq 1 - \frac{1}{k} \sum_{mh} |b_{mh}| + O\left(\frac{1}{k^2}\right)$$



※ $r(B)$ の1次, 2次モーメントを計算したいが, B の多重積分ができない
→ 平均場近似と $1/k$ 展開で1個の積分まで落ちる

$$r(B) = P(B) \exp\left(\int dA r(A) \log P(V|A, B)\right)$$

※ 展開により確率分布が ill-defined になる可能性があるので注意が必要 → 後の話とも関係

[partC] 近似で得られる解析解

以上の試行分布の仮定と事前分布の近似を、
試行分布の一般的な関係式に代入し、事後平均と事後分散を計算

$$r(A) = P(A) \exp\left(\int d\mathbf{B} r(\mathbf{B}) \log P(V|A, \mathbf{B})\right) \quad r(\mathbf{B}) = P(\mathbf{B}) \exp\left(\int dA r(A) \log P(V|A, \mathbf{B})\right)$$



Kawasumi-KT (2018)

A の事後平均 $\bar{a}_{lh} = \sum_{h'=1}^H \sum_{m=1}^M v_{lm} (\hat{\Sigma}_{\mathbf{A}l}^{-1})_{hh'} \bar{b}_{h'm}$

A の事後分散 $(\Sigma_{\mathbf{A}l})_{hh} = \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{A}l}^{-1})_{hh}$

B の事後平均 $\bar{b}_{hm} = \sum_{h'=1}^H \sum_{l=1}^L v_{lm} (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{hh'} \bar{a}_{lh'} - \frac{1}{kZ_B} \sum_{h'=1}^H \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{h'h} \operatorname{erf}(\omega_{h'm})$

B の事後分散 $(\Sigma_{\mathbf{B}m})_{hh} = \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{hh} - \frac{1}{kZ_B} \sum_{h'=1}^H \sqrt{\frac{2}{\pi \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{h'h}}} \{ \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{h'h} \}^2 \exp(\omega_{h'm})$

$$- \left(\frac{1}{kZ_B} \right)^2 \left\{ \sum_{h'=1}^H \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{h'h} \operatorname{erf}(\omega_{h'm}) \right\}^2$$

1/k展開による
補正項

[partC] 近似で得られる解析解

前ページで定義していない変数

$$\omega_{hm} := \frac{1}{\sqrt{2\sigma^2(\hat{\Sigma}_{B_m}^{-1})_{hh}}} \sum_{h'=1}^H \sum_{l=1}^L v_{lm} (\hat{\Sigma}_{B_m}^{-1})_{hh'} \bar{a}_{lh'}$$

$$(\hat{\Sigma}_{A_l})_{hh'} := \sigma^2 \delta_{hh'} + \sum_{m=1}^M ((\Sigma_{B_m})_{hh} \delta_{hh'} + \bar{b}_{hm} \bar{b}_{h'm})$$

$$(\hat{\Sigma}_{B_m})_{hh'} := \sum_{l=1}^L ((\Sigma_{A_l})_{hh} \delta_{hh'} + \bar{a}_{lh} \bar{a}_{lh'})$$

$$S_B := \sum_{h=1}^H \sum_{m=1}^M \left\{ \sqrt{\frac{2\sigma^2(\hat{\Sigma}_{B_m}^{-1})_{hh}}{\pi}} \exp(-\omega_{hm}^2) + \left(\sum_{h'=1}^H \sum_{l=1}^L v_{lm} (\hat{\Sigma}_{B_m}^{-1})_{hh'} \bar{a}_{lh'} \right) \operatorname{erf}(\omega_{hm}) \right\}$$

$$Z_B = 1 - \frac{S_B}{k}$$

行列 B の(近似)事後分布に関する正規化因子
以降の話で重要

[partC] 解析解の性質

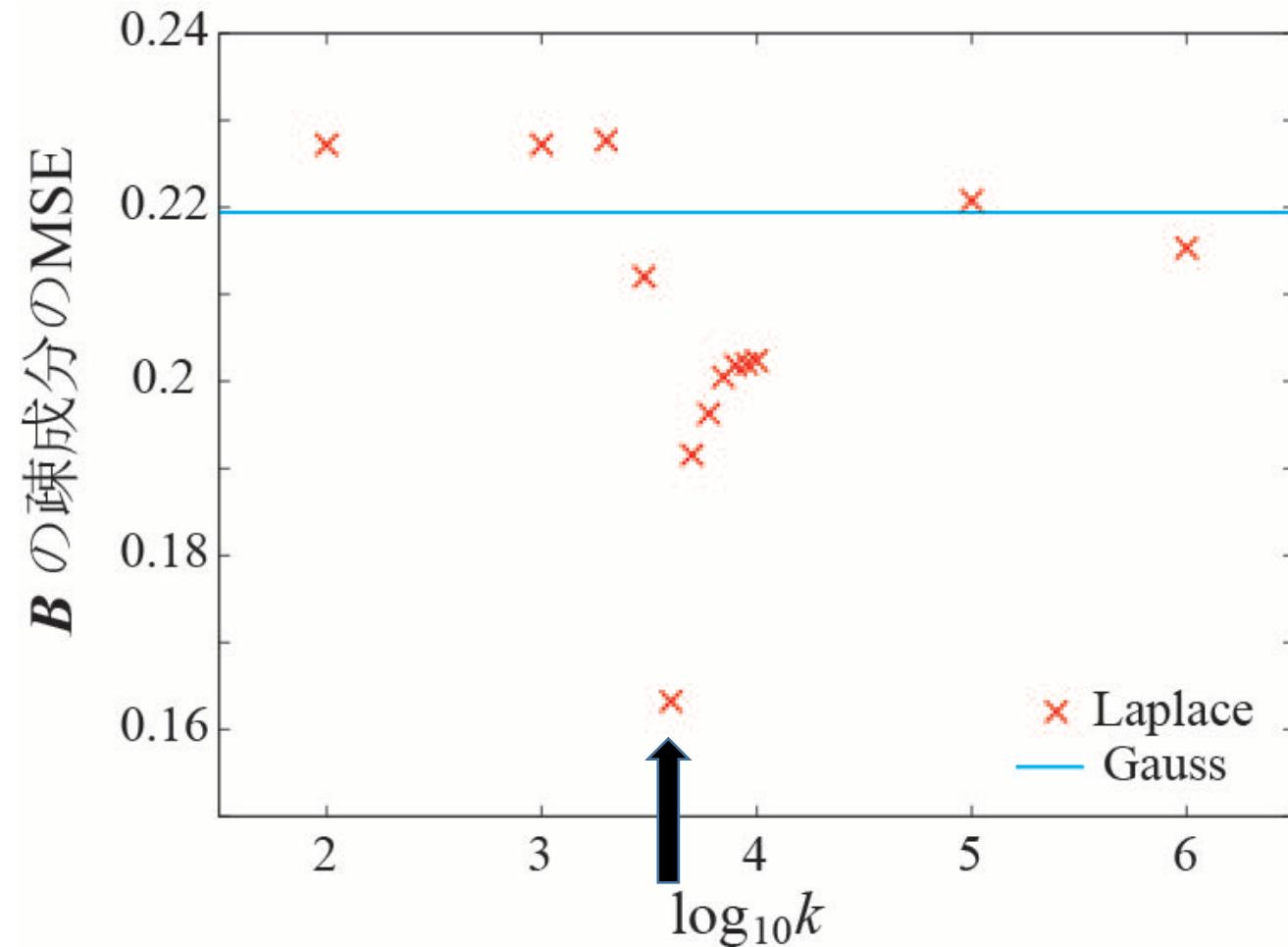
A の事後平均	$\bar{a}_{lh} = \sum_{h'=1}^H \sum_{m=1}^M v_{lm} (\hat{\Sigma}_{\mathbf{A}l}^{-1})_{hh'} \bar{b}_{h'm}$	1/k展開による 補正項
A の事後分散	$(\Sigma_{\mathbf{A}l})_{hh} = \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{A}l}^{-1})_{hh}$	
B の事後平均	$\bar{b}_{hm} = \sum_{h'=1}^H \sum_{l=1}^L v_{lm} (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{hh'} \bar{a}_{lh'} - \frac{1}{kZ_B} \sum_{h'=1}^H \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{h'h} \text{erf}(\omega_{h'm})$	
B の事後分散	$(\Sigma_{\mathbf{B}m})_{hh} = \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{hh} - \frac{1}{kZ_B} \sum_{h'=1}^H \sqrt{\frac{2}{\pi \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{h'h}}} \{ \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{h'h} \}^2 \exp(\omega_{h'm})$	
		$- \left(\frac{1}{kZ_B} \right)^2 \left\{ \sum_{h'=1}^H \sigma^2 (\hat{\Sigma}_{\mathbf{B}m}^{-1})_{h'h} \text{erf}(\omega_{h'm}) \right\}^2$

- 青い部分は全て kZ_B を分母に含む
- これらの項がない場合 ($kZ_B \rightarrow \infty$) は, B の事前分布が **一様分布** の場合
 → 青い部分はラプラス分布による補正項
- $kZ_B \rightarrow 0$ では補正項の寄与が大きくなる → 以降の話と関係

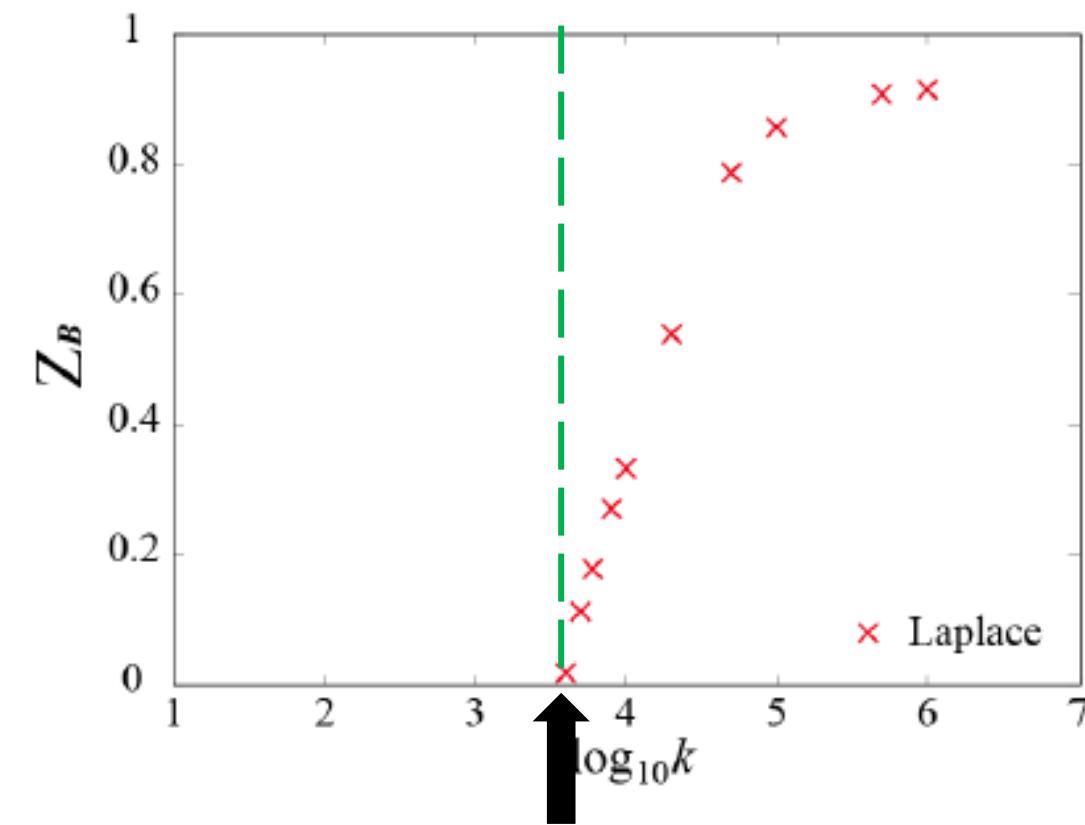
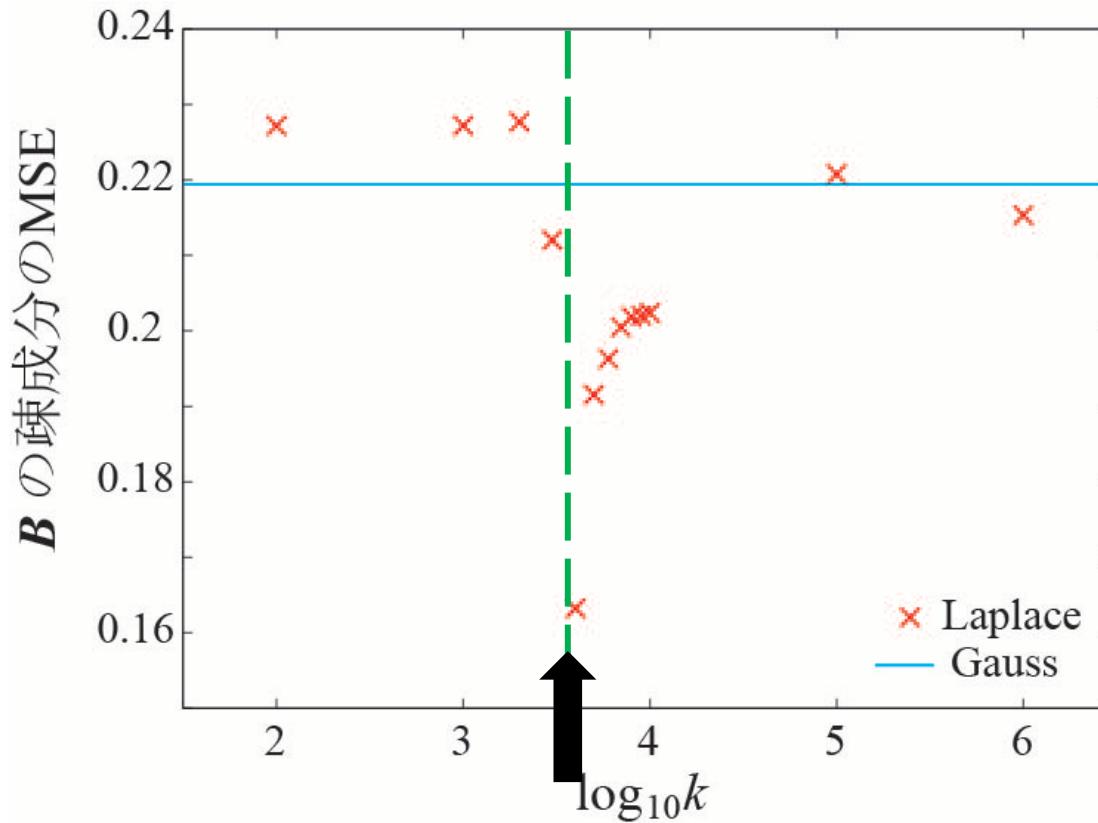
前記の解を
逐次代入型アルゴリズムとして
数値実験で評価

- スパース正解行列 B の
非ゼロ成分比は0.5
- ラプラス分布のパラメータ k は
固定し、様々な値で実験

特定の k の値で
ラプラス事前分布による
スパース行列の再構成が
ガウス事前分布より良好



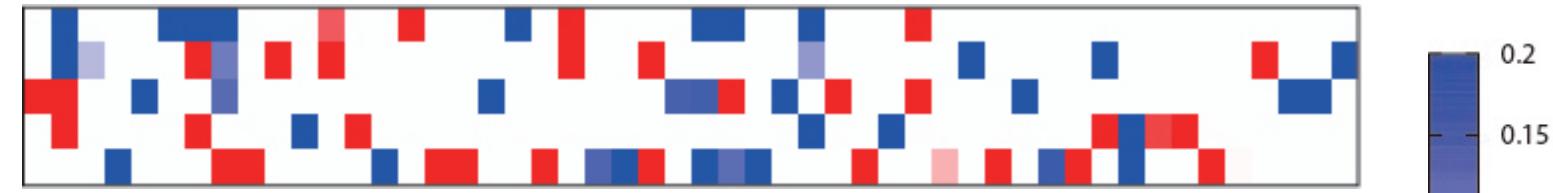
[partC] 結果に関する考察(正規化因子の零点)



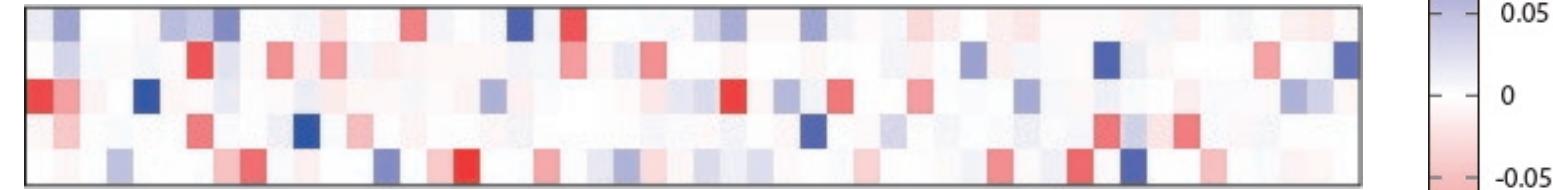
- B がスパース行列となるには、 B の分布の正規化因子である Z_B がほぼ0となるような k を選べばよい
- 十分大きな k では $Z_B \rightarrow 1$ となる (このとき $kZ_B \rightarrow \infty$)

最適な k の値付近で, B の復元結果を可視化 (B : 5×50 行列)

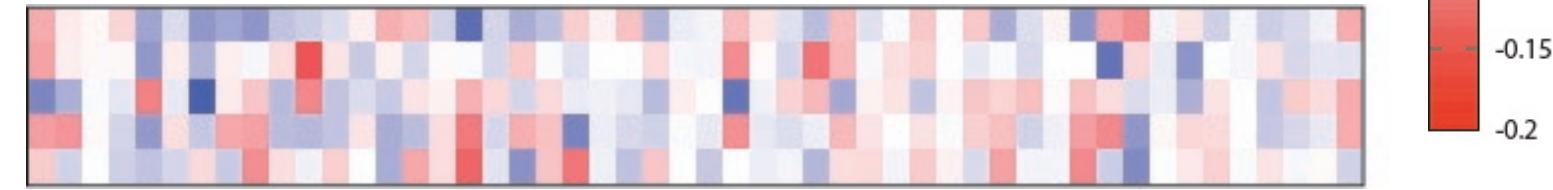
用意した
スパース正解行列 B



ラプラス事前分布で
求めた B



ガウス事前分布で
求めた B



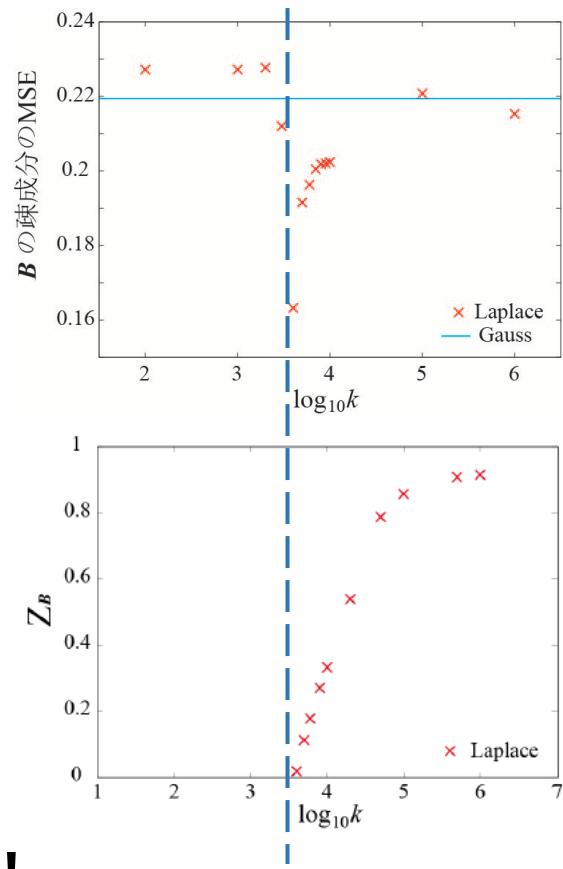
ラプラス事前分布で求めた B は, 用意したスパース行列に近い(が, 少し余計な成分が見える)
※ 行列サイズが大きくなると, 誤差が大きくなってしまう...

事前分布のパラメータ k の適切な値
 $= Z_B$ (近似事後分布の正規化因子) の k に関する零点
(実験からの知見, 理論的には理由は明確ではない)

問題点:

与えられた行列 V に対し, Z_B のゼロ点は解析的には不明
行列分解の数値実験を行わないと, Z_B のゼロ点の位置は不明

- 最適な k を知るには, k を変えて実験する必要あり, 面倒 !
- スパース行列の解を数値的に求めながら,
最適な k を適応的に探索することを考える



スパース行列分解のアルゴリズム実行時に、
ラプラス分布のパラメータ(正則化係数) k を以下のように更新

$$k^{(n)} = (1 - \varepsilon)k^{(n-1)} + \varepsilon S_B^{(n-1)}$$

括弧付き添字: アルゴリズムの更新ステップ数

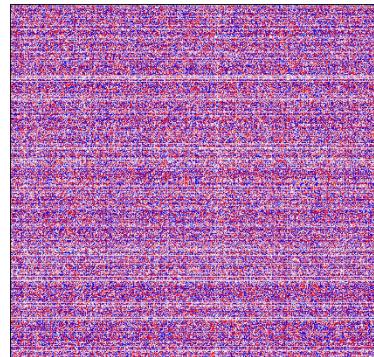
ε : 忘却係数 → アルゴリズムを収束させるためのパラメータ ($0 < \varepsilon < 1$)
 ε は小さく取る, 大きすぎるとアルゴリズムが不安定化

k が収束すれば, ステップ数 $n \rightarrow \infty$ のときに $k \approx S_B$

$Z_B = 1 - \frac{S_B}{k}$ なので, このとき $Z_B \rightarrow 0$ となりラプラス分布による補正項が効く

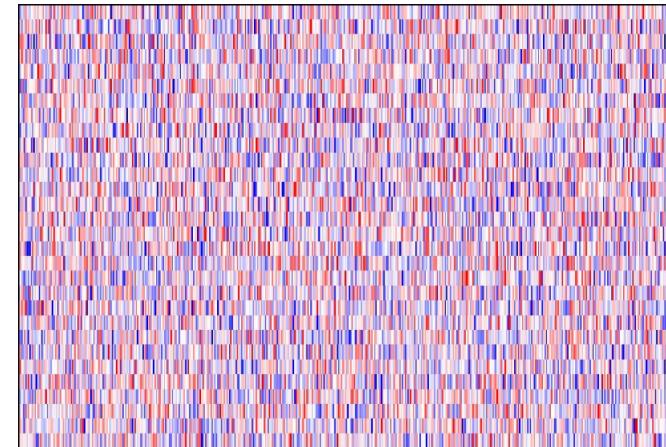
[partC] 自動調整下でのスパース行列分解の結果

元の行列と分解行列解との比較例 ($L = 500, M = 500, H$ (中間次元) = 30, B の非ゼロ成分比 = 0.2)

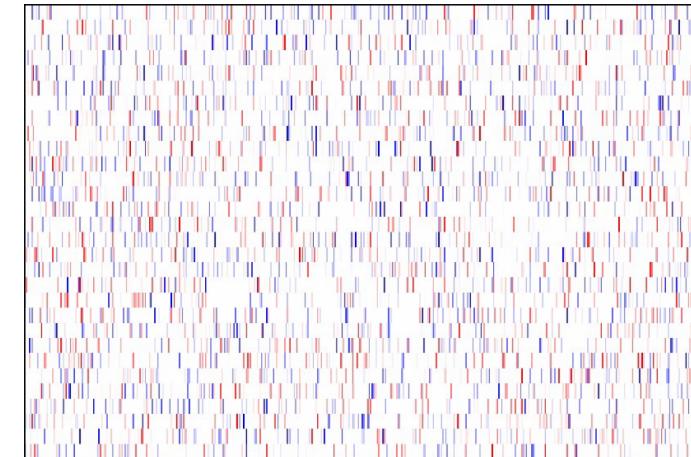


V

A
(用意した
正解)

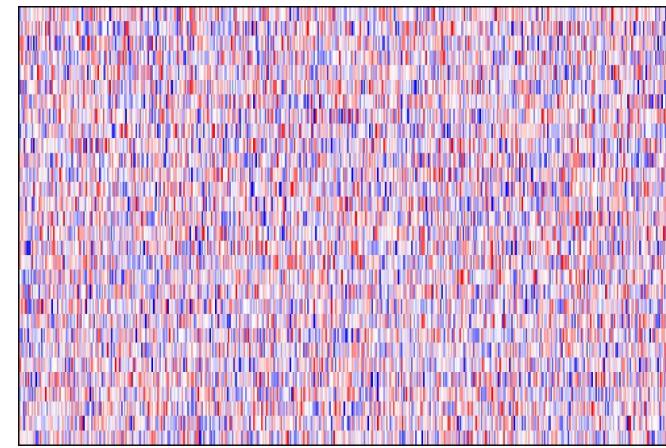


B
(用意した
正解)

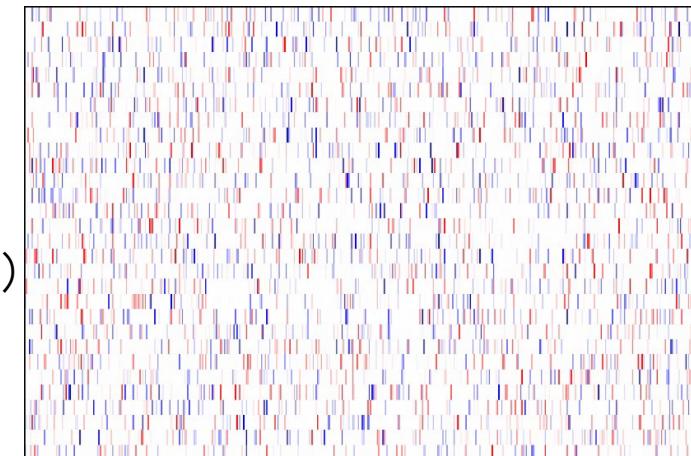


+2.5

A
(求めた
分解行列)



B
(求めた
分解行列)



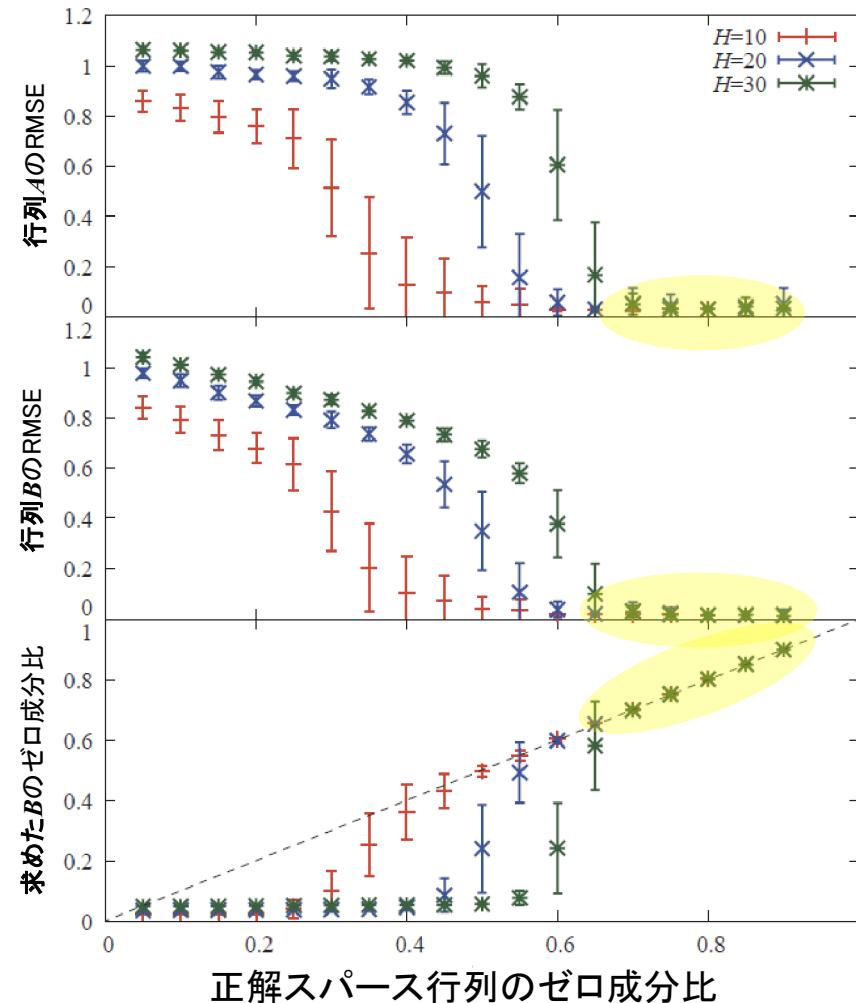
0

-2.5

行列サイズが大きくても

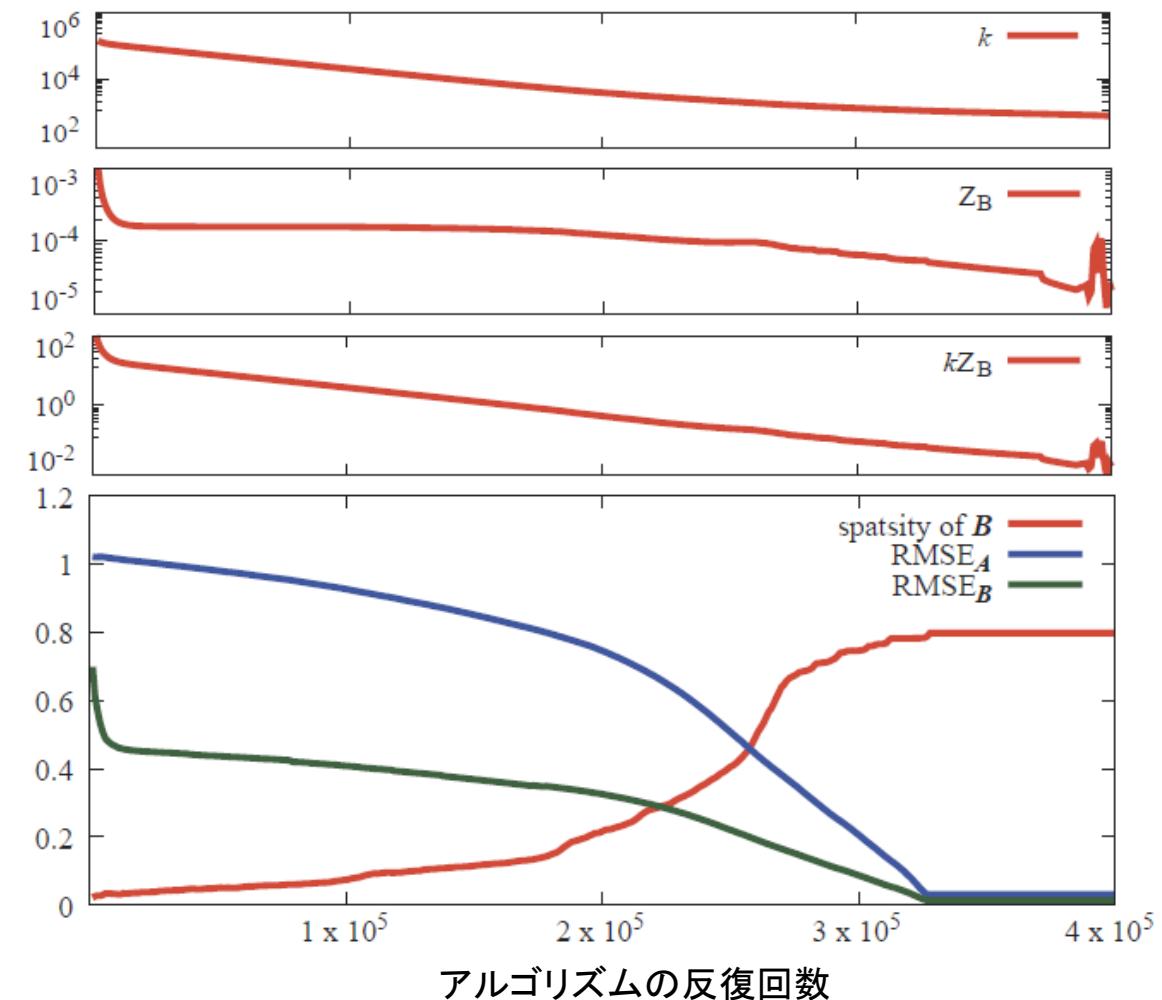
用意した正解と分解行列がほぼ一致, 差はほとんどない → 適応的な k の決定の結果

スパース行列復元のアルゴリズムの性質



スパース性が高い領域では
正解スパース行列がほぼ復元できている

Kawasumi-KT (2023)



反復アルゴリズムを続けると
ある点で誤差がほぼゼロになる (ただし収束が遅い)

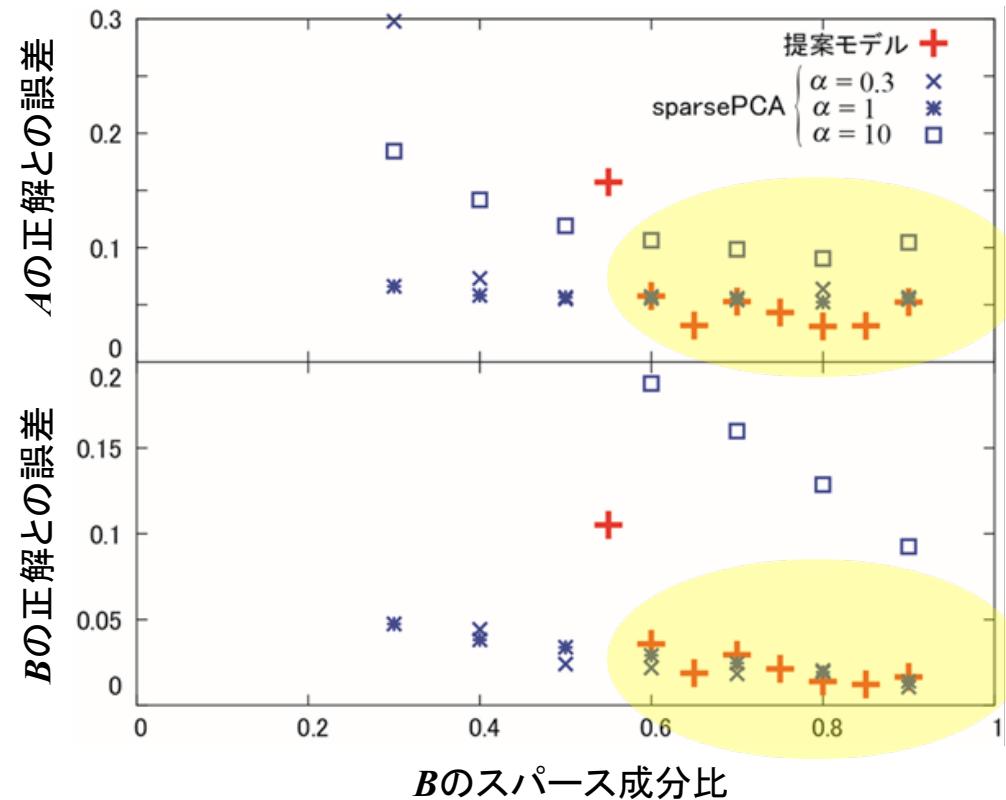
既存手法との比較:

sparsePCA (Mairal et al. (2009)): $\min_{A,B} \left(\|V - AB\|_{\text{FRO}}^2 + \tilde{\alpha} \|B\|_1 \right)$ を解くアルゴリズム

Kawasumi-KT (2023)

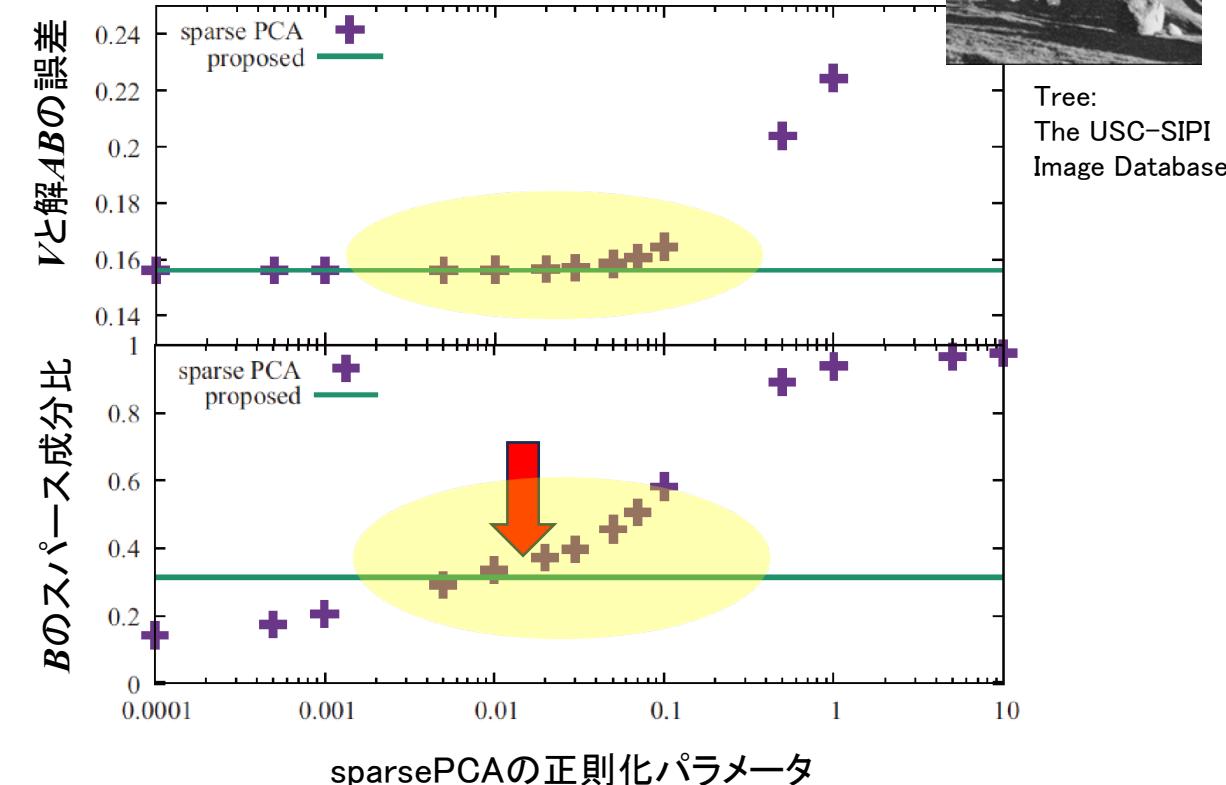


(A)人工データ: 正解として与えた行列 A, B の求解



スパース性が高い領域で正解行列の再現性が高い
sparsePCAと同程度かそれ以上

(B) 実画像のスパース行列分解



積 AB の誤差が最低の領域内で
 B のスパース性が高い解を得ている?

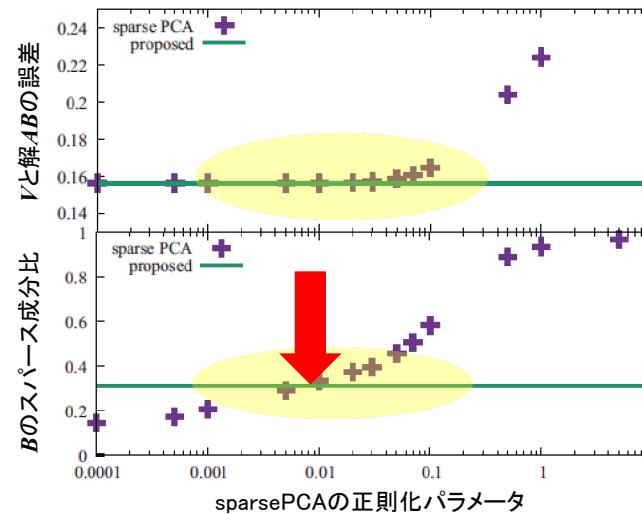
[partC] 自動調整下でのスパース行列分解の結果

38/46

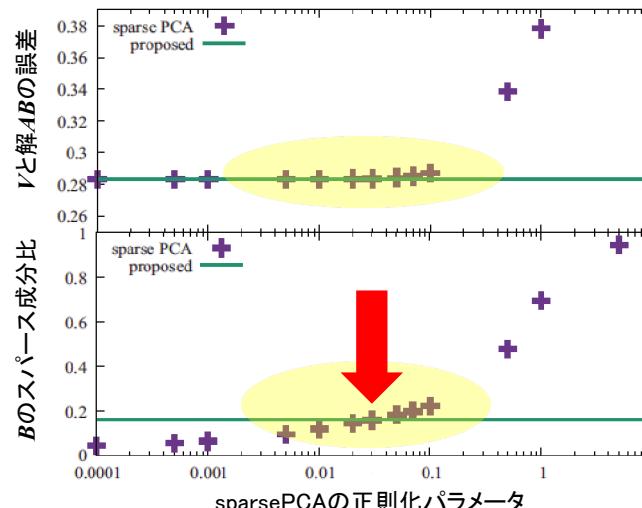
既存手法 (sparsePCA) との比較 ($H = 40$)



Tree

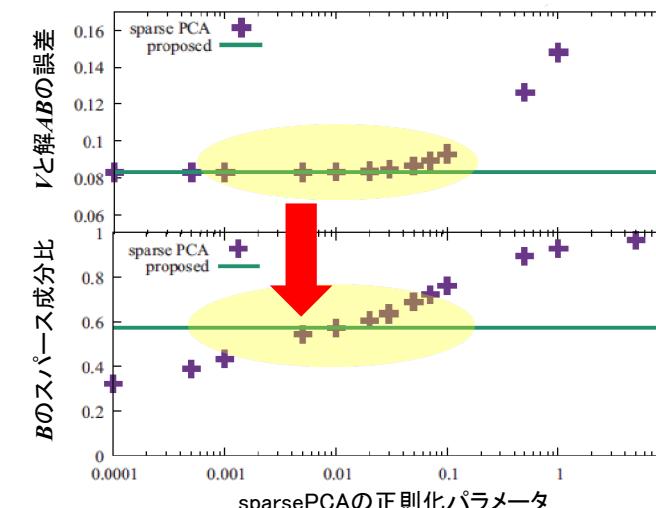
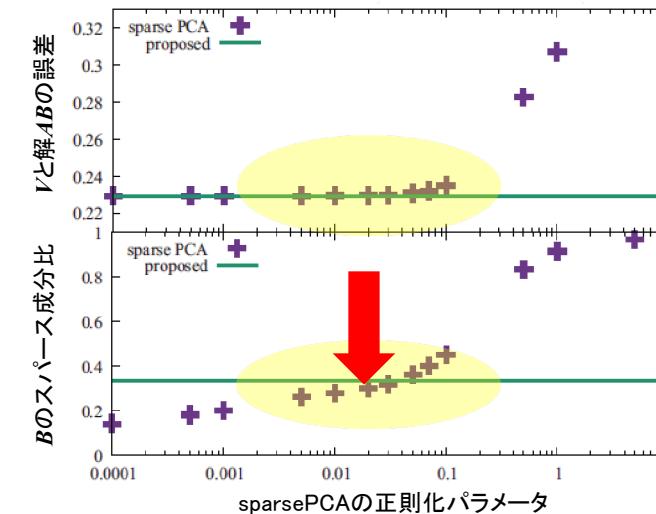
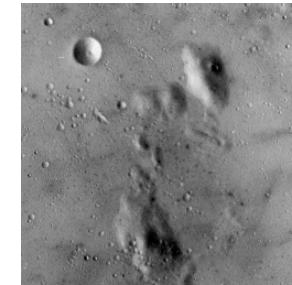


Aerial



Kawasumi-KT (2023)

Moon surface



どの画像でも
同じ傾向が見える

以上の画像データはThe USC-SIPI Image Databaseより引用

変分ベイズ法で行列分解問題が解けていることが分かった
 解の性質とアルゴリズムの動的挙動が解析的に知りたい…
 → スパース行列分解の変分ベイズ解は複雑なので面倒？

まず事前分布がガウス分布である行列分解モデルから

Nakajima-Sugiyama (2011)

$$\hat{A} = \frac{1}{\sigma^2} V \hat{B} \hat{\Sigma}_A$$

$$\hat{B} = \frac{1}{\sigma^2} \hat{\Sigma}_B \hat{A}^T V$$

$$\hat{\Sigma}_A = \sigma^2 \left(\hat{B} \hat{B}^T + M \hat{\Sigma}_B + \sigma^2 I_H \right)^{-1} \quad \hat{\Sigma}_B = \sigma^2 \left(\hat{A}^T \hat{A} + L \hat{\Sigma}_A + \sigma^2 I_H \right)^{-1}$$

$\hat{A}, \hat{B} : A, B$ の事後平均

$\hat{\Sigma}_A, \hat{\Sigma}_B : A, B$ の事後共分散

逐次代入で解くと分解行列解が得られる → 行列分解アルゴリズムとして利用可能

[partD] 行列分解と連想記憶(Hopfield模型)との関係

Hopfield模型

複数のニューロンの状態

$$\begin{bmatrix} S_1 \\ S_2 \\ \vdots \\ S_L \end{bmatrix}$$

想起パターン

$$\begin{bmatrix} \xi_1^{(1)} \\ \xi_1^{(2)} \\ \vdots \\ \xi_1^{(H)} \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} \xi_2^{(1)} \\ \xi_2^{(2)} \\ \vdots \\ \xi_2^{(H)} \end{bmatrix}, \dots, \begin{bmatrix} \xi_L^{(1)} \\ \xi_L^{(2)} \\ \vdots \\ \xi_L^{(H)} \end{bmatrix}$$

一致するか
評価

行列分解

復元行列 \hat{A} (変分ベイズ解)
(←ニューロン)

$$\begin{bmatrix} \hat{A}_1 & \cdots & \hat{A}_h & \cdots & \hat{A}_H \end{bmatrix}$$

一致するか
評価

原行列 A (正解行列)
(←想起パターン)

$$\begin{bmatrix} A_1 & \cdots & A_h & \cdots & A_H \end{bmatrix}$$

Hopfieldモデル(連想記憶モデル)と行列分解を上のように対応

- 正解行列の特定のベクトル → 想起したいパターン
- 復元行列の特定のベクトル → ニューロンの状態

Hopfield模型の古典的解析手法を行列分解に応用できるか？

- Amit–Gutfreund–Sompolinsky (1985, 1987), 自由エネルギー形式, 想起可能性
- Shiino–Fukai (1993) → 学習則ベース, 想起可能性
- Amari–Maginu (1988) → 学習則ベース, 想起ダイナミクス

$$\hat{A} = \frac{1}{\sigma^2} V \hat{B} \hat{\Sigma}_A$$

$$\hat{B} = \frac{1}{\sigma^2} \hat{\Sigma}_B \hat{A}^T V$$

$$\hat{\Sigma}_A = \sigma^2 \left(\hat{B} \hat{B}^T + M \hat{\Sigma}_B + \sigma^2 I_H \right)^{-1} \quad \hat{\Sigma}_B = \sigma^2 \left(\hat{A}^T \hat{A} + L \hat{\Sigma}_A + \sigma^2 I_H \right)^{-1}$$

これらは行列要素に依存する量 → 行列分解の性質を表す大域的な量の性質が知りたい

連想記憶における信号雑音分離との類似性を利用

→ 上記を連則記憶の学習則とみなし, 信号(埋め込んだ正解行列)と雑音成分に分けたい

信号成分 → 正解との重なり
(正解行列と分解行列との
 h 番目のベクトルの重なり)

$$\mu_h = \sum_{l=1}^L a_{lh} \hat{a}_{lh} \quad \nu_h = \sum_{m=1}^M b_{hm} \hat{b}_{hm}$$

雑音成分 → ガウス雑音
(正解行列と分解行列との
異なる行/列のベクトルの重なり)

$$\sum_{l=1}^L a_{lh'} \hat{a}_{lh} \sim N(0, \sigma_{ah'}^2) \quad \sum_{m=1}^M b_{h'm} \hat{b}_{hm} \sim N(0, \sigma_{bh'}^2) \quad (h' \neq h)$$

[partD] 信号雑音分離で得られる簡約式

A, B ともガウス事前分布の場合の変分ベイズ解は
信号雑音分離仮説が正しければ、次を満たすと予想。(変数8個の関係式)

Tamai-Kawasumi-KT, STATPHYS28

・正解との重なり

$$\mu_h = LM \frac{\hat{\Sigma}_{Ah}}{\sigma^2} (\nu_h + M \mu_h \hat{\Sigma}_{Bh})$$

・干渉ノイズ分散

$$\sigma_a^2 = \left(LM \frac{\hat{\Sigma}_{Ah}}{\sigma^2} \right)^2 \left(\sigma_b^2 + \left(\frac{\hat{\Sigma}_{Bh}}{L} \right)^2 \sigma_a^2 \right)$$

・共分散行列の
対角成分

$$\hat{\Sigma}_{Bh} = \frac{\sigma^2 / (LM)}{(1/L)(\sigma^2 / (LM)) + L \hat{\Sigma}_{Ah} + \rho_A}$$

・ h 列/ h 行ベクトルの
正規化定数

$$\rho_A = \left(LM \frac{\hat{\Sigma}_{Ah}}{\sigma^2} \right)^2 \left(\nu_h^2 + (H-1)\sigma_b^2 + 2 \frac{\hat{\Sigma}_{Bh}}{L} \mu_h \nu_h + \frac{\sigma^2}{M} \rho_B \right)$$

$$\rho_B = \left(LM \frac{\hat{\Sigma}_{Bh}}{\sigma^2} \right)^2 \left(\mu_h^2 + (H-1)\sigma_a^2 + 2 \frac{\hat{\Sigma}_{Ah}}{M} \mu_h \nu_h + \frac{\sigma^2}{L} \rho_A \right)$$

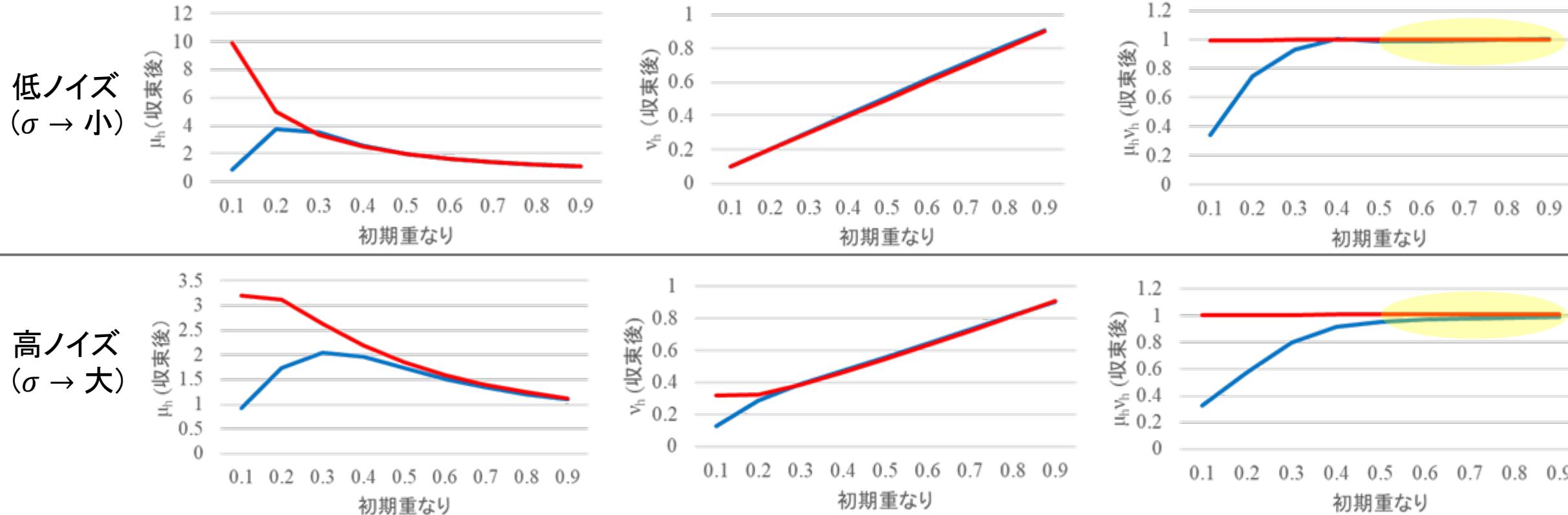
$$\nu_h = LM \frac{\hat{\Sigma}_{Bh}}{\sigma^2} (\mu_h + L \nu_h \hat{\Sigma}_{Ah})$$

$$\sigma_b^2 = \left(LM \frac{\hat{\Sigma}_{Bh}}{\sigma^2} \right)^2 \left(\sigma_a^2 + \left(\frac{\hat{\Sigma}_{Ah}}{M} \right)^2 \sigma_b^2 \right)$$

$$\hat{\Sigma}_{Ah} = \frac{\sigma^2 / (LM)}{(1/M)(\sigma^2 / (LM)) + M \hat{\Sigma}_{Bh} + \rho_B}$$

[partD] 簡約式の解と数値実験との比較

簡約式を逐次的に解くことで、簡約式の解となる重なり μ_h, ν_h の値を調べる。 (μ_h, ν_h) の重なりの初期値を変更)
実際の行列分解実験と比較： 簡約式（赤線一），数値実験（青線一）



収束後の積 $\mu_h \nu_h$ が 1 に近ければ収束解は用意した正解行列に近い

- μ_h, ν_h の初期値 $\sim 1 \rightarrow$ 正解行列付近に収束，簡約式は分解行列解の性質をほぼ正しく記述
- μ_h, ν_h の初期値 $\sim 0 \rightarrow$ 正解行列から遠くに収束→行列が回転（成分が混合）し正解から離れる

[partD] 自由エネルギー形式による簡約式の導出

これまでの解析は変分ベイズ解を用いたが、自由エネルギーから出発することも可能

変分ベイズ自由エネルギーを事後平均、事後共分散 $\hat{A}, \hat{B}, \hat{\Sigma}_A, \hat{\Sigma}_B$ で表現

$$\begin{aligned} 2f = & \frac{\|\mathbf{V} - \hat{\mathbf{B}}\hat{\mathbf{A}}^T\|_{\text{FRO}}^2}{\sigma^2} - L \log |\hat{\Sigma}_A| - M \log |\hat{\Sigma}_B| + \text{Tr}(\hat{\mathbf{A}}^T \hat{\mathbf{A}} + L \hat{\Sigma}_A) + \text{Tr}(\hat{\mathbf{B}}^T \hat{\mathbf{B}} + M \hat{\Sigma}_B) \\ & - \frac{1}{\sigma^2} \text{Tr} \hat{\mathbf{A}}^T \hat{\mathbf{A}} \hat{\mathbf{B}}^T \hat{\mathbf{B}} + \frac{1}{\sigma^2} \text{Tr}(\hat{\mathbf{A}}^T \hat{\mathbf{A}} + L \hat{\Sigma}_A)(\hat{\mathbf{B}}^T \hat{\mathbf{B}} + M \hat{\Sigma}_B) \end{aligned}$$

大域的変数を導入し、自由エネルギーをこれらで表現しなおす

・正解行列と
推定行列の重なり

$$\mu_h = \frac{1}{L} \sum_{l=1}^L a_{lh} \hat{a}_{lh} \quad \nu_h = \frac{1}{M} \sum_{m=1}^M b_{hm} \hat{b}_{hm}$$

・干渉ノイズ

$$\sigma_{Ahh'}^2 = \left(\frac{1}{L} \sum_{l=1}^L a_{lh'} \hat{a}_{lh} \right)^2 \quad \sigma_{Bhh'}^2 = \left(\frac{1}{M} \sum_{m=1}^M b_{h'm} \hat{b}_{hm} \right)^2$$

・正規化因子

$$\rho_{ah} = \frac{1}{L} \sum_{l=1}^L \hat{a}_{lh}^2 \quad \rho_{bh} = \frac{1}{M} \sum_{m=1}^M \hat{b}_{hm}^2 \quad e_h = \frac{1}{LM} \sum_{l=1}^L \sum_{m=1}^M \varepsilon_{lm} \hat{a}_{lh} \hat{b}_{hm}$$

[partD] 自由エネルギー形式による簡約式の導出

得られた自由エネルギーから、導入した変数間の関係式を導出（状態方程式）

$$\mu_h = \frac{M}{\sigma^2} \hat{\Sigma}_{Ah} \nu_h \left(1 - M \frac{\hat{\Sigma}_{Ah} \hat{\Sigma}_{Bh}}{\sigma^2} \right)^{-1} \quad \sigma_{ah'h}^2 = \frac{1}{2} \left(\frac{M \hat{\Sigma}_{ah}}{\sigma^2} \right)^2 \sigma_{bh'h}^2 \left(1 \pm \sqrt{1 + \frac{4}{L \hat{\Sigma}_{ah}} \left(\frac{\sigma^2}{M \sigma_{bh'h}^2} \right)^2} \right) + \frac{\hat{\Sigma}_{ah}}{L}$$

$$\nu_h = \frac{L}{\sigma^2} \hat{\Sigma}_{Bh} \mu_h \left(1 - L \frac{\hat{\Sigma}_{Ah} \hat{\Sigma}_{Bh}}{\sigma^2} \right)^{-1} \quad \sigma_{bh'h}^2 = \frac{1}{2} \left(\frac{L \hat{\Sigma}_{bh}}{\sigma^2} \right)^2 \sigma_{ah'h}^2 \left(1 \pm \sqrt{1 + \frac{4}{M \hat{\Sigma}_{bh}} \left(\frac{\sigma^2}{L \sigma_{ah'h}^2} \right)^2} \right) + \frac{\hat{\Sigma}_{bh}}{M}$$

$$\hat{\Sigma}_{Ah} = \frac{\sigma^2}{\sigma^2 + M \hat{\Sigma}_{Bh} + M \rho_{Bh}} \quad \rho_{Ah} = \mu_h^2 + \frac{M}{\sigma^2} (\hat{\Sigma}_{Ah})^2 \nu_h^2 + \left(\frac{L - H + 1}{L} \hat{\Sigma}_{Ah} + \sum_{h' \neq h} \sigma_{Ah'h}^2 \right)$$

$$\hat{\Sigma}_{Bh} = \frac{\sigma^2}{\sigma^2 + L \hat{\Sigma}_{Ah} + L \rho_{Ah}} \quad \rho_{Bh} = \nu_h^2 + \frac{L}{\sigma^2} (\hat{\Sigma}_{Bh})^2 \mu_h^2 + \left(\frac{M - H + 1}{M} \hat{\Sigma}_{Bh} + \sum_{h' \neq h} \sigma_{Bh'h}^2 \right)$$

$$e_h = \hat{\Sigma}_{Bh} \mu_h^2 + \frac{1}{\alpha} \hat{\Sigma}_{Ah} \nu_h^2 + \sigma^2 \frac{\hat{\Sigma}_{Ah} \hat{\Sigma}_{Bh}}{\sigma^2 - M \hat{\Sigma}_{Ah} \hat{\Sigma}_{Bh}} - \frac{L + M}{2} \frac{\hat{\Sigma}_{Ah} \hat{\Sigma}_{Bh}}{\sigma^2 - M \hat{\Sigma}_{Ah} \hat{\Sigma}_{Bh}} \sum_{h' \neq h} \sqrt{\sigma_{Ah'h}^2 \sigma_{Bh'h}^2} \quad (\alpha = M / L)$$

信号雑音分離による簡約式と対応付けられそうだが、若干ずれている
→ どの程度差異があるか数値的に検証の必要あり

本日のまとめ

(A) 行列分解問題の種類を紹介

$$V = A B$$

(B) 行列分解問題とベイズ統計学との関連性を紹介

ベイズ推定を通じ、様々な統計力学的手法が解析に利用できる

(C) ラプラス事前分布の下でのスパース行列分解を解析

幾つかの近似の下で、変分ベイズ法での解析解の表式が得られる → アルゴリズム
正規化因子の零点から正則化係数を決めるとき、スパース行列が精度良く復元（理由？）

(D) ガウス事前分布下での行列分解の変分ベイズ解析解の性質を

Hopfield模型の信号雑音分離法を援用し解析

正解行列との初期重なりが高い → 簡約式での解の記述が妥当（重なりが低いとずれる？）

今後も調べるべき点はあります…